
仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers + strikeform

ファントム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは S t r i k e r s
+ s t r i k e f o r m

【Nコード】

N 8 7 0 7 0

【作者名】

ファントム

【あらすじ】

野上幸太郎が魔法世界へイマジンを追ってきた。
彼がそこで見たものは・・・！？

プロローグ（前書き）

初めてのSSなので誤字などがあったり駄文と呼ぶにふさわしい物になってしまいかもしれませんががんばります。

プロローグ

『時の列車デンライナー、次の駅は過去か？未来か？』

のがみこうたろう

野上幸太郎とその相棒デイの問題が解決して1ヶ月・・・

幸太郎は今の自分の自分の状況を確認するために、昨日から現在^{いま}に至るまでのことを思い出していた

・・・・・・・・・・・・・・・・

始まりは昨日のこと、幸太郎は突然オーナーに呼び出され、相棒のデイと共にターミナルへむかった。

「別の世界？」

「ええ、『A・R・WORLD』とは似て非なる世界 とも言いましょうか。」

幸太郎は正直訳がわからなかったがとりあえず話を進めることにした

「で、俺はその世界に行けばいいんだな。」

「幸太郎君は話が早くて助かりますねえ。」

「で、じいちゃん達は？」

じいちゃんとは幸太郎の祖父こと野上良太郎のことである。

わざわざ自分に頼らなくとも電王はすでにいるのだ。

「良太郎君たちには別件でうごいてもらっています。」

「ふーん、つまり俺はその世界に紛れ込んだイマジン探せばいいんだな。」

「ええ、では頼みましたよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

しかし今自分はあきらかにイマジンより妙なものを見ている・・・
「何で人が空飛んでんだよ・・・」

プロローグ（後書き）

幸太郎「幸太郎と」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

泣いた青鬼「どうも、今回一言も話すことのなかったテディです・

・

幸太郎「いや、安心しろテディ次はちゃんとセリフがあるからな！

！」

幸太郎「そんなわけで、今回はテディのセリフと『あの人』が登場。

」

???「俺、参上!!」

幸太郎「おまえじゃないって……」

別世界の戦い

「テディ、さっきの見たか？」

「ああ、あれは跳力にものではなくまさしく飛行だった！」

「なんか、よく分かんないけど とにかくイマジンの情報を集めに行くぞ。」

冷静を装ってもやはり幸太郎も驚きを隠しきることはできなかった

「幸いここは人が多いようだ、誰かに話を聞いてみよう。」

しかしテディの提案を拒否するかのよう

「ドオオオン！！」

巨大な爆発音が鳴り響いた。

「なんだ今の！？テディ行くぞ！」

「応！」

一方そのころ・・・

「皆さん！！早く避難してください急いで！！」

オレンジ色の髪をツインテールにしている少女が市民に避難を促し

ていた

「よし、民間の人は避難したわね、行くわよスバル!!」

「OK!!ティア」

青い髪のボーイッシュな少女が加わり戦闘が始まる

だが少女たちは機械兵『ガジェット』相手に苦戦してしまう・・・
敵の数が多すぎるのだ

「（グウ・・・私はこんなところでやられるわけにはいかない・・・）
」

その時・・・

「行け!! テディ」

幸太郎の合図とともにテディはNEW電王の武器『マチエーテディ』
となりガジェットの一体に体当たりする

「「え!!」」

驚いたのは2人の少女だ突然やってきた謎の男と青鬼がガジェットの
一体を吹っ飛ばしたのだから無理もない

「ちょっと! その人危ないから逃げてください!!」

ティアが幸太郎に強い口調で言う

しかし幸太郎は・・・

「べつに逃げる必要ないからいいの。」

そして幸太郎がライダーパスを手にとると彼の腰に金色と黒色で装飾された

『NEWデンオウベルト』が現れる

ミュージックホーンが流れ彼は自らを戦士に変えるための言葉を言う

「変身」

「Strikeform」

鋭角的な電仮面や全身を走るデンレール

胸のターンテーブルなどが特徴の

幸太郎のオーラをフリーエネルギーに変換して変身する戦士

仮面ライダーNEW電王へと彼の姿は変わる

「カウントは？」

マチエーディの持ち手のすぐ上の部分にあるディの顔が聞く

「とりあえずあの娘達の周りにいるの全部まとめて15・・・いや13でいいや」

別世界の戦い（後書き）

幸太郎「幸太郎と」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

幸太郎「なんで俺がわざわざ別世界に来なくちゃいけないんだよこ
うゆうのはディケイドの仕事だろ・・・」

テディ「私としては認知度が上がるからうれしいんだが」

幸太郎「でもキャラが増えてきたらこのコーナー乗っ取られるかも
しれないぞ。」

テディ「何！？では今すぐ次回登場のこの世界の主人公に話をつけ
なくては！！」

幸太郎「むしろ読者の皆様の方だろ。」

テディ「皆様・・・どうか・・・どうか・・・私の出番をこれ以上とらな
いで下さいませ！」

幸太郎「そんなわけで次回は主人公登場」

???「こんどこそ、俺、さんじょ「違う」っ!？」

電王と魔導師

「3」

「ハアッ！」

「2」

カウントが2になると同時に幸太郎はライダーパスをNEWデンオウベルトにあてる

『Full Charge』

マチエーデイにエネルギーが溜まっていく、NEW電王の必殺技マチエーデイで敵を切り裂く「カウンタースラッシュ」を使っためである

「1」

「ハアアア！！！」

「0」

カウント0と同時にガジェットが爆発していく

「さて、これで終わりつと。」

「す、す……」

スバルが呆然としながら言う

「あなた、一体何なんですか!？」

ティアナが怒気すら含まれているようにも聞こえる声で問う

「見てわからない? ていうか人に正体聞くときはまず自分からですよ。」

「そうね、私は時空管理局機動六課スターズ4のティアナ・ランスターです(怒)」

あきらかに小バカにしている幸太郎の態度に不機嫌のようだ

「同じく、時空管理局機動六課スターズ3のスバル・ナカジマです!」

こっちは特に気にした様子もない

「時空管理局? テディ知ってるか？」

「いや、聞いていない。」

マチエーテディから元の姿に戻るテディ
幸太郎も同じく変身を解く

「時空管理局を知らない! ? それにさっきの姿・・・ティアもしかしてこの人」

「次元漂流者かもしれないわね・・・」

「その次元漂流者つてのが何かは知らないけど、俺たちはイマジン追ってきたんだ。」

「いまじん？」

「そうだ、あんた達こいつに似てる化け物知らない？」

そういつてテディの肩に手を置く幸太郎

「ば、化け物」

若干傷ついたようだ

幸太郎とテディはその後自分たちのこと、イマジンのことをアバウトに説明した

「私たちは知らないけど、機動六課にいけば何かわかるかも」

ティアナが続けて言う

「それに私たちにはあなたを保護する義務があるから一緒に来てもらいます」

「どうするテディ？」

「私たちはこの世界について何も知らないしいいんじゃないか」

「まあ、お前がそう言うなら」

•

ヘリコプターに乗った幸太郎達に

「はじめまして、時空管理局機動六課スターズ1の高町なのはです、先ほどは私の部下を助けていただきありがとうございます。」

と話しかけてくる女性がいた

さっきまでスバルたちと何か話していた茶髪のサイドポニーの人だ

「俺は野上幸太郎、こいつは相棒のテディ」

「はじめまして、**テディ**です。」

デディが敬礼する

そして一同を乗せたへりは機動六課へと向かっていく

電王と魔導師（後書き）

なのは「なのはと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

幸太郎「俺は!？」

なのは「にはは・・・テディちゃんには見せ場があつてほしいって声があつたけど幸太郎君にはなかったから・・・」

テディ「すまない、幸太郎今まで世話になった。」

幸太郎「ここでそれを言うか!!」

なのは「さて今回は私の幼馴染達が出てきます、ではさようなら。」

「

幸太郎「困るんだよね!俺の扱いこんなになっちゃって!!」

運命の出会い

機動六課に着いた幸太郎たちは早速部隊長室に呼ばれた

しかし、幸太郎が自動ドアを通り部屋の中に入ろうとした瞬間・・・

「がっ！」

自動ドアが閉まり幸太郎が挟まれる
そして半ば無理やりドアを開け入る

「幸太郎大丈夫か！？」

テディがあせりながら聞く

「別にこんなのお前が来るまで日常茶飯事だったろ？」

なにか言おうとしていた目の前の人達は全員ポカンとしているいきなり強烈過ぎるもの（不幸）を見せてしまったようだ

「うそやろ・・・今まで一回も壊れたことないのに」

「しかもさっき私が来た時はなんともなかったよ・・・」

「で、あんたたちは？」

「あ、時空管理局機動六課部隊長の八神はやてです。」

「私は時空管理局機動六課ライトニング1のフェイト・T・ハラオ

ウンです。」

「私はライトニング2のシグナムだ。」

「あたしはスターズ2のヴィータだ。」

「私はリインフォース？ですー。」

「何だコイツ、イマジンか！？」

「違いますう私ははやてちゃんのユニゾンデバイスですー！！」

「機動六課ライトニング3のエリオ・モンディアルです。」

「私はライトニング4のキャロ・ル・ルシエです、でこの子はフリードリヒです。」

各自自己紹介が終わる

そして幸太郎が自分のことを話す番が来た

「まず俺は野上幸太郎、でこいつは」

「デディです。」

デディがお辞儀しながら言う

「単刀直入に言うと俺たちは別世界から来た、ってわけ。」

「て、ことはやっぱり次元漂流者なのかな？」

「いや、さつきへりでその次元漂流者つてのは聞いたけど違う。俺たちは自分の意思でこの世界に来たんだ。」

「なんでまたわざわざそないなこと？」

はやてが問う

「俺たちはイマジンを追ってきたんだ。」

「さつきも言ってたけどそのイマジンて何なんですか？」

こんどはスバルが問う

「簡単に言えば未来からの侵略者で時の運行を乱すやつらかな。」

「『『『『『『『『『『『！侵略者』』』』』』』』」

「全員ハモったな」

「て、そんなのんきなこと言っとらんで、くわしく説明してーな！
！」

「デディ」

「（あ、人任せにした。）」

全員の共通意識であつた

「人間のイメージにより怪人としての肉体を得てイメージした人間と契約しその人間の願いをかなえることで過去へとび過去を都合の

良いように改竄し、現在や未来を変えることを最大の目的とするもので、なお過去が改竄された場合タイムパラドックスがおき『時の運行』が乱れその結果誰も想像できないような恐ろしいことが起ります。」

「ていう訳、理解^わかった？」

「じゃあさっきの姿は？」

ティアナが問う

「あれはイマジン倒すための電王^てって力。」

「電王？」

「このライダーパスをつかって変身するの、はい質問終わりっ。」

「え、ちょっと！」

このあと結局質問は続き幸太郎が答えないためティが答えたらしい……

運命の出会い（後書き）

はやて「はやてと」

テディ「テディと」

2人「特別予告コーナー」

テディ「今回は次回予告ではなく今度作者がやる予定の特別大長編の予告だ」

はやて「感想に『平成で一番好きなライダー（主人公限定）を書いてどしどし送ってください』とのことや」

テディ「見事1位になったライダーは特別大長編にゲスト出演します！！」

はやて「なお、どうしても1人に選べない場合は1〜3位までのランキングをつけて送って下さい」

テディ「ちなみにもあまりにも投票が少なかった場合この計画は破綻しますその場合は後日あらためて発表します。」

はやて「しめきりは11月22日までです」

2人「ではよろしく（よろしゅう）お願いします」

機動六課と予想外の再開

「なるほどな。まあ幸太郎君とテデイが何者かは大体分かったし、そっちにもこっちが何者かは分かってもらったやろ？」

「ま、大体はな。」

「それでこれが最後の質問やねんけどな。」

「何？」

幸太郎は少しめんどくさそうだった

「テデイの話がホンマやったら幸太郎君たちは平行世界から来たことになるやろ、そんなん時空管理局でも到底ムリな話やのにどうやって来たんや？」

それは正体がどうこうより単純な好奇心による質問だった

・・・しかし幸太郎はあまり気持ちのよさそうな顔をしていなかった

「・・・ちよつと前にライダー大戦っていういろんな並行世界を巻き込んだ戦争があつたんだよ、それには俺の身内も巻き込まれてそんな時さつき話したオーナーって人がどうやったのかは知らないけどその身内を並行世界へ送った時とおんなじ方法で来たんだよ。」

「あ・・・ごめんな！！幸太郎君」

今までになかった幸太郎のまじめな態度にはやても驚きながらも謝

罪する

「ま、じいちゃん生きてるし別にいいけど。」

一瞬で戻った。

「そっか、で幸太郎君ここからが本題やねんけどな」

はやてがワンテンポおいてから言う

「機動六課に協力してもらえへんやろか？」

この言葉にはさすがに迷うそぶりを見せる幸太郎

「この機動六課は正直人手不足でやねん、それで幸太郎君のさつき戦ったときの映像を見たんやけど

幸太郎君に民間協力者って形でぜひ協力してほしいねん。」

「この機動六課は危険な任務を請け負うことも多い。場合によつたら死ぬかもしれへん。やからもちろん断ってくれてもいいんやで。」

「・・・俺たちも元々イマジン追っかけてきた時点で危険は承知の上なんだ、イマジンに関する情報があれば必ず教えるって約束なら協力してもいいよ。」

幸太郎の返答にはやての顔色がパアアッと明るくなる

「ほんまか！？テディもええねんな？」

「幸太郎が決めたこともちろん。」

さつきから無言だったテディが即答する

「じゃあ、改めてよろしくね、幸太郎君。」

「うん、よろしく。」

なのはが幸太郎に言う

「よろしくね、幸太郎って呼んでいいかな？」

「別に何でもいいよ。」

フェイトと挨拶を済ませる

「おまえは我がお供その四だ。」

「!!!!」

機動六課のメンバーが驚く中、幸太郎が無言のアップパーをクリーンヒットさせる

「なんで、お前がいる訳？」

幸太郎が問うが返事がないただの屍のようだ

「幸太郎さん！何ですかこれ！？」

スバルがジークをつつきながら言う

「これは見なかったことにしといて。」

幸太郎がジークを投げ捨てながら言う

「え、あ・・・分かった・・・」

ヴィータが全員に意思を代弁して言う

「ところで、主はやて。」

「ん？どないしたんやシグナム？」

シグナムがはやてに提案する

「彼等の戦闘データを取るためにも、彼等が言っていた電王という力とぜひ一度、模擬戦を行ってみたいのですが。」

「うーん、たしかになあ。どーや幸太郎君やってくれるか？」

「俺たちは別にいいけど。」

幸太郎は特に迷った様子もない

「たしかに2人の実力も見たいしな、わかったわ模擬戦は明日や。」

機動六課と予想外の再開（後書き）

フェイト「フェイトと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「なぜ、ジークが・・・」

フェイト「いきなり殴っちゃったけど大丈夫なも？」

テディ「それは大丈夫ですから、安心してください。」

フェイト「でもこの子何しに来たんだろ？」

テディ「それは次回幸太郎と聞いて見ます。」

フェイト「シグナムとの模擬戦もあるのに大変だね。」

テディ「ご心配痛み入ります。」

フェイト「さつきから敬語使ってるけどもう仲間なんだからそんなに硬くならなくていいよ。」

テディ「え あ、はい。」

フェイト「では次回もお楽しみに。」

将との戦い（前書き）

以前から応募している平成主人公ライダーアンケート
ぜんぜん来てないので応募お願いします。

将との戦い

「ん？」

「どうしたんだテディ？」

「いや、ジークの背中に何か貼り付けられている。」

テディは倒れているジークの背中に貼られていた紙を取る

「幸太郎！これは良太郎からの手紙だ！」

「テディ読んでみてくれ。」

幸太郎の言葉とともに機動六課のメンバーもテディの周りに集まる

「読むぞ、

『幸太郎へ

また巻き込んだじゃってごめんね、僕のほうもできるだけ早く終わらせて手伝いに行くから。」

ジークはたまたま見つけて、協力してくれるみたいだから行ってもらったんだ。

幸太郎が協力してくれて本当うれしかったよ。

太郎より』

良

SIDE

幸太郎

「じいちゃん・・・」

送ってきた物^{バカ}はともかく、純粹に俺の心配してくれたのがうれしかった

『あつ、それとジークを幸太郎のところ送ったのはモータロスの提案だよ結構いいところあるよね。』
と書いてある。」

・・・は？え、何？じいちゃんあのモータロスが本気で『心配』すると思ってるの、ていうか絶対に嫌がらせでしょ。どうかんがえても。あ、なんか腹抱えて大笑いしてるモータロス見えてきた。いや、してるに違いない。帰ったら殴ろう、あのエセ赤鬼。

幸太郎

SIDE OUT

「えーっと、つまりこの子もイメージんだけど仲間ってことでいいのかな？」

なのはが幸太郎に問う

「厄介押し付けられただけだね。」

幸太郎は冷静なでも誰がどう見ても怒っている顔で答えた

とりあえずこの話題はここまでにしたほうがいいと本能的に悟った六課のメンバーであつた

「じゃあ今日はこれまで！解散」

はやての合図が出ると六課のメンバーはそれぞれ帰っていき

幸太郎とティとジーク（気絶）はフェイトに今日から自分たちが泊まる部屋まで案内してもらった

•

翌日

六課のメンバーの訓練が終わったところでシグナムと幸太郎の模擬戦が始まるうとしていた

「準備はいいな、野上」

「セットアップ」

シグナムは甲冑を身に纏い愛刀レヴァンティンを握る

幸太郎もミュージックホーンをならしながらライダーパスを使う

「変身」

.....

「へえ、あれが電王か。」

観戦席にいるはやてが感心したような声をだす

「かつこいい．．！」

エリオは自分の世界に入っていた

．．．．．

「テディ」

幸太郎が二回指を鳴らすとテディが幸太郎の愛刀マチェーテディへと変わる

「ヴォルケンリッター烈火の将、シグナム参る！！！」

「言つとくけど俺の強さは・・・本物だよ!!」

戦いが始まった

幸太郎は相手に自分の体を密着させるアクロバティックな戦い方でシグナムの隙をうかがう

幸太郎がマチエーテディで切りかかった瞬間

「私にいつまでも同じ戦法は通じんぞ!」

シグナムは幸太郎の攻撃を受け流し反撃をきめたしかし幸太郎はすばやくマチエーテディで地面を撃ちシグナムと距離をとる

「ふふ・・・いいぞ、それでこそ戦い外がある!!」

「昨日から薄々思ってたけどこの人バトルマニアなわけ?」

「おそらくそうだろう」

幸太郎の質問にテディが即答する

キーン!キーン!

剣がぶつかり合う音が響く

「(なるほど・・・こいつ確かに強い、だが!)」

シグナムが幸太郎の攻撃をはじきそのまま空中へと浮かびあがる。

「それってあり？」

幸太郎の言葉など完全に無視しシグナムが攻撃態勢になる

「レヴァンティン！」

> シュランゲフォルム<

レヴァンティンの刀身が鞭のように伸びて幸太郎に不規則的な攻撃をする

「けっこうやるじゃん・・・でも」

幸太郎は鞭を地面にたたきつけるとそのまま鞭の上を走ってシグナムに接近した

「何！？」

シグナムからも驚愕の色が見て取れる

「ハアアア！！」

幸太郎はシグナムのすぐ近くまで来るとそこでジャンプし上からシグナムを地面にたたきつける

.....

「すごい・・・！シグナム副隊長と互角いやそれ以上で戦ってる。」

ティアナが驚きと嫉妬すら含んだ視線を幸太郎に向ける

「ほんとにすごいよ、それにシグナムが楽しそうにしてるし。」

フェイトはまるで子供を見る親のような目で二人の戦いを見ていた

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「わるいけど、こつちもあんま時間ないし次で決めさせてもらうよ。」

「いいだろう、レヴァンティン、カートリッジロード!」

『Full Charge』

二人が距離を詰める

「紫電一閃!」

「カウンタースラッシュ!」

普段は技名はいわない幸太郎だが今回はなんとなく言ってみた

「うおおおお!」

剣と剣がぶつかる

そして立っていたのは

「……シグナムだった、幸太郎は後方数メートルへっ
吹っ飛ばされていた

しかし、彼女の首には剣の先端のようなものが突きつけられていた、それはデンガッシャーソードフォームのものである

そしてデンガッシャーの柄を持った幸太郎が言う

「これで俺の勝ちでしょ？」

将との戦い（後書き）

スバル「スバルと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

スバル「シグナム副隊長に勝っちゃうなんて・・・」

テディ「正直危なかったが、なんとか勝てた。」

スバル「ところであの鳥は？」

テディ「さっき目を覚ましたのでこれから詳しい話を聞くつもりだ。」

「

スバル「へえー、ね 私も一緒に行っている？」

テディ「ああ、大丈夫だ。」

厄介者（前書き）

これからしばらくテスト期間なので次回の更新は12月1日になります。

ごめんなさい！！

厄介者

「嘘だろー！アイツ、シグナムに勝っちゃったぞ！」

「まさか、幸太郎君二刀流やったとはな・・・」

ヴィータとはやてが驚愕の声を漏らす

「なんか、ちよつと卑怯な気がしますけど・・・」

スバルが正直な感想を言う

「いや、野上は何も卑怯なことなどしていない。実戦では予想できない事態に陥ることなどいくらでもある、それに気づかなかった時点で私の負けだ。」

戻ってきたシグナムがスバルの意見を否定する

「だが、幸太郎が完璧な状態であそこまで追い詰められたのは久しぶりだ。あの時幸太郎が機転を効かせていなかったら負けていたのは私たちだ。」

テディがシグナムにフォローを入れる

「それはそうと、俺達の力はどこではどれくらい通用するわけ？」

幸太郎が話を本題に戻す

「ああ、そうやったな、シャーリー。」

はやてがそう言うとおのほうからめがねをかけた濃いブラウンの髪
の女性がやって来た

「はーい。」

「二人の模擬戦のデータの解析はもう終わってますよ。」

「あんたは？」

幸太郎がシャーリーと呼ばれた女性に問う

「はじめまして、シャリオ・フィニーノです。シャーリーって呼んでください。」

「知ってると思うけど、野上幸太郎」

シャーリーと幸太郎が挨拶を済ませる

「八神部隊長、彼、すごいですよ！！彼の力は魔法とは別のものですけど、魔力値に変換したら何と彼のランクはS-です！」

その瞬間、時間が止まった・・・

「マジかい！」

はやてが驚くのも無理がなかった。それほどの力を持つものは時空管理局でも数えるほどしかないからだ

フォワード陣にいたっては開いた口が閉じなくなっていてしまっている

「それがどれくらいすごいのか分かんないけど、じいちゃんももっと強いよ。」

幸太郎がこの場でさらにとんでもないことを言う

もはや誰も何も話せなくなっていた

.....

「で、幸太郎君はこれからどうするん？」

部隊長室に戻ってやっと全体の空気が落ち着いたころにはやてが幸太郎に聞いてきた

「とりあえず、ジークに話を聞いてみるよ、じいちゃん達から何か聞いているかもしれないし。」

「それなら、私達も一緒に聞きたいし、よかつたらここに連れて来てもらえんかな？」

「ああ、別にいいよ。」

「私も一緒に行こうか？」

デディが提案するが幸太郎が一人で十分だったので渋々あきらめた
そして幸太郎は部隊長室を出て行く

・・・もちろん彼がドアに挟まれたのは言うまでもない

・・・・・・・・・・・・・・・・

「遅いな。」

幸太郎が部隊長室を出て20分がたっていた、さすがに遅すぎるのでシグナムが口に出した言葉だ

「幸太郎・もしかしたら道に迷ってるんじゃない・・・」

フェイトが幸太郎を心配する

「少し様子を見てきます。」

「あ、だったら私も行くよ。」

デディとスバルが部隊長室を出て行く

そして幸太郎とデディの部屋に到着する

そして彼女達が見たものは!?

「……………部屋の中のソファでえらそうにふんぞり返ってどこから出したのかオロオミンCをグラスに入れて飲んでいる幸太郎だった。」

「あれ？幸太郎さんなんか雰囲気変わりました？」

スバルもさすがに変だと思ったのかテディに問う

しかしテディから答えが返ってくることはなかった

「貴様、幸太郎から早く出て行け！！」

いつものテディからは想像もできないような声でテディが幸太郎？に掴みかかろうとしていた

しかし…………

「主に手を上げるとは何事か！！」

幸太郎？がそういうとテディはみるみる縮んで最終的には手のひらサイズになってしまった

「え！？ちよつと大丈夫！？」

スバルが小さくなったテディを拾う

「あれ、どうなってんの？」

スバルの質問にテディは悔しそうに答えた

「ジークに憑依された・・・」

「憑依って、ジークって味方なんじゃ？」

「ああ、だが見ての通りとても厄介なやつなんだ、おそらくまためちゃくちゃな因縁をつけられたのだろう。くっ　あの時やはり幸太郎といっしょに行っていれば・・・」

「テディが後悔と自虐を始めたため代わりにスバルがジークに話しかける」

「えーっとジーク、私達と一緒に来てくれないかな？ちょっと話があるんだけど・・・」

「なぜ私が動かなければならない？動くのは私ではなく世界のほうだ！」

「えーっと」

「つまり話があるならそっちから来いと？」

「仕方なくスバルは一度部隊長室に戻り大まかな説明をし、そして今度はフォワード陣と隊長たち全員で来た」

「これはまた、すごい変わりようだね・・・」

「なのはが驚きと呆れたのを混ぜたような声で言う」

「おい、その女。」

「え？私？」

視線を向けられたスバルが戸惑う

「そうだお前だ、私は腹が減った何か料理を持って来い。」

おそらく指名されたのがヴィータだったらブチ切れていた命令をするスバルが何か食べ物を捜しに行っている間に残ったメンバーで臨時会議を始めた

「（で、あれはどうすれば戻るのよ？）」

ティアナがテディに問う

「（前に門矢士という人物が憑依されたときは殴ればジークも一緒に外へ押し出されていた。）」

「（要はたたけば直るんだろ？簡単じゃねえか）」

「（ヴィータちゃん、そんな昔のテレビみたいな言い方したらかわいそうだよ。）」

「（とりあえず、スバルが戻ってきて飯を食べて油断している時がチャンスだろう。）」

そしてスバルが戻ってきてジークに食堂でもらってきた適当な食事を渡したそしてジークが料理を食べ終わり次の皿を命令すると同時にヴィータが腹を殴った、力任せに本気で殴った。

そしてジークと幸太郎が分離する

「何をする！無礼者！」

「うるせーよ！めんどくせえ！」

ここから腹を抱えながら悶える幸太郎をよそに、ヴィータとジークによる低レベルな悪口大会が起きたのは別の話

厄介者（後書き）

ヴィータ「ヴィータと」

デディ「デディの」

2人「次回予告コーナー」

デディ「ひどい言い争いだつたな。」

ヴィータ「結局あたしが勝ったけどな。」

デディ「（というか、ほとんど会話が成立してなかったような・・・）

」

ヴィータ「どうしたんだよ天井、急に黙って。」

デディ「！！その呼び方を・・・どこで・・・」

ヴィータ「いや、なんとなくこつちの方がよびやすいからよあ・・・

ってあれどうした天井？」

デディ「・・」

・・」

・・」

・・」

ヴィータ「え〜っと、とりあえず次回はホテル・アグスタでの任務

だ！！」

デディ「・・」

・・」

・・」

・・」

番外編 狸のサンタさん（前書き）

テスト勉強の合間にどうしてもやりたかったの
でまあ、クリスマスズいぶん先ですけど。

番外編 狸のサンタさん

皆さん、こんばんは。機動六課部隊長 八神はやてです。

今日はクリスマスということなので日々がんばっている皆にウチからプレゼントを配ろうという計画や！！（ちなみにクリスマスのことは事前に話してあって、欲しい物は紙に書いて靴下に入れておくように説明済み。）

ということで、最初の獲も・・・プレゼントを配るのは！

我が幼馴染ことなのはちゃん！そしてフェイトちゃん

・・・・・・・・・・・・・・・・

よし、なのはちゃんとフェイトちゃんの部屋に到着。さうてなのはちゃんとフェイトちゃんは何をお願いしたのかな？

『マッサージ機

高町なのは』

『特に無し

フェイト・T・ハラオウン』

・・・見なかったことにしよ。・・・いや、だってねえ
のはちゃんの苦労は分かってるけど、老人相手にマッサージ機持っ
てこさせる気やったん、なのはさん？
あと、フェイトちゃんそれやったら最初っから書かんといて、しか
もキレイな字で

さあ、次、行ってみよう

次はスバルとティアナや！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

さあ到着しました、さてスバルとティアナの願いは！？

『アイス

スバル・ナカジマ』

『執務官の座

ティアナ・ランスター』

大変です、皆さんこの子達はサンタを何だと思っているんでしょう？
アイスはまあ・まだ良い、でもこれはあかんやろ、サンタに権力を要求する子供初めて見ましたよ。

とりあえず、スバルの靴下にガリ○リ君をいれてつと。さあ次次！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

来ました！幸太郎君とテディとジークの部屋です。

さてさて、幸太郎君の願いは！？

『人並みの幸せ

野上幸太郎』

『出番

テディ』

・・・あれ？目が霞んで見えへん。おかしいなあ何で涙が止まらんのやろ。

- - 15分後 - -

ふう、なんかもう嫌になってきたな、あかんは最近の若者は・・・

エリオとキャロとヴィータとシグナムの願い見せたるか？

『お兄さん

エリオ・モンディアル&キャロ・ル・ルシエ』

サントに人身売買しろと？

『^{ジーク}手羽先の謝る姿

ヴィータ』

何があつた！！？

『宇宙一強いやつと戦いたい

シグナム』

無理。

さて、寝よう！

もう、手に負えません！！

電王の新しい翼 前編（前書き）

今度もう一本「リリなの」と仮面ライダーのSS書こうと思うんですけど次のうちどれがいいと思います？

？天の道を行き総てを司る男の息子が主人公（カブト）

？ディケイド版地獄兄弟のその後（カブト）

？火野映司が主人公（オーズ）

ちなみに大長編のアンケートは延長することになったので、これからぜひ送ってください。

電王の新しい翼 前編

「さて、サンタをドラオンボールと勘違いしてる皆に、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。」

移動するヘリの中ではやてが六課のメンバーに言う

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、およびレリックの収集者は現状ではこの男、違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者Dr・ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める。」

はやてがそこまで言った所でフェイトが話をつなぐ

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応覚えておいてね。」

「」「」「はい」「」「」

フォワード陣の返事を聞くと今度はリインフォース？が話を続ける

「で、今日これから向かう先がここ『ホテル・アグスタ』」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね。」

なのはが言い終わったところで幸太郎が質問する

「ところで俺とデディはどうすればいいの？」

「私もいるぞ。」

「幸太郎君とテディちゃんは私たちと一緒に建物の中の警備だよ。」

「なぜ、これらは私の名を言わぬ？」

ジークにそう聞かれても苦笑いするしかできないフォワード陣であった

「あの、シャル先生さつきから気になってたんですけどその箱って？」

キャロの問いにシャルと呼ばれた女性は答えた

「ん？ああ、これ？隊長たちのお仕事着。」

シャルがそう答えると彼女のポケットから何かビンが落ちた

「なにか落ちましたよ。」

テディがさかさそれを拾いシャルに渡す

「あ、ありがとう。これいい傷薬だから一応持ってきたんだけど、とっても臭いのよね。」

「へえ。」

幸太郎がそのビンに触ったのが運の尽きだった

突如そのビンのふたが完全に物理法則を無視した飛び方をしたのだ

「うお！」

もちろん被害は幸太郎だけではなくへり全体に届いた

狭い密室・・・ニオイが充満するのに時間はかからなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう、ひどい目にあつた……」

疲れ果てた顔のはやてがそう呟くまあ無理もない

「あれ、そういえば幸太郎君は？」

「あ、あそこにいるよ。」

「ああ、皆さん 良かった見つかつて。」

「え！幸太郎君……だよね？」

なのはがそう聞くのも当然だなぜなら今の幸太郎は執事服のようなものを着て黒髪にも一部青いメッシュが入っていて要は雰囲気が変わっていたのだ

「今はテディです。幸太郎が『さっきの』で気絶してしまったので。」

「

テディ

「幸太郎がなのは達に向かってサムズアップする

「そっか、テディちゃんも憑依出来たんだったね。」

なのはも納得したようでそれ以上の質問はしてこなかった

.....

なのは隊長は時空管理局のエースで、フェイト隊長も優秀な執務官、八神部隊長に至ってはSSランクの魔導師で四人の守護騎士まで従えている。

エリオとキャラコはあの年でBランク

スバルは馬鹿だけど、潜在能力と可能性の塊

そして、突然やってきて時を守るために来たという、シグナム副隊長にすら勝った2人

やっぱり凡人は私だけか……

だけどそんなことは関係ない私は立ち止まるわけにはいかないんだ

•

そしてティアナが考え事をしていた場所の近くの森にフードを被つ

た男と紫色の髪をした少女がいた。

少女の指には虫のようなものが止まっていた

「ドクターの玩具が近づいてきてる・・・。」

「っ！クリアルビントのセンサーに反応！シャーリー」

ガジェットドローンとの戦いが始まったのはそれから数分後のことであつた・・・

電王の新しい翼 前編（後書き）

ジーク「プリンスと」

「幸太郎「幸太郎の」

「幸太郎「次回予告コーナー っていつしよに言ってくれ!!」

ジーク「なぜ私がそのような事をしなければならない？」

「幸太郎「そんなことを言っていたら次回の出番が消されてしまうぞ。」

ジーク「バカな・・・我が出番が・・・消える・・・？」

幸太郎「（やっと目覚めたのにどうなってるのこの状況？）」

ジーク「しかたない、次なる話で我が力を貸してやろう。」

電王の新しい翼 後編

ホテル・アグスタでは現在、隊長達を中心としたガジェットとの戦いが繰り広げられていた

情報を受けた丁幸太郎は戸惑っていた

「早く皆を助けなければ・・・幸太郎、早く目を覚ましてくれ!!」

そう、もう一人の電王と違い幸太郎はイマジンを武器に変えて戦うため幸太郎が気絶した状態では変身できないのだ

「この時を待っていた!!」

テディが戸惑っていると、どこからかやってきたジークがテディを追いつき幸太郎の体の主導権を手に入れていた

「ジーク!何をするつもりなんや!?!」

いつもは軽いノリのはやてだが、さすがにこの事態にジークに付き合っている暇はなかった

「なに、家臣のピンチを救うのも主の務めだ。」

W^{ウィング}幸太郎はそう言うと外へ向かって歩いていった

.....

・
「スバル！クロスシュートAいくわよ！」

「応！！」

ティアナはクロスミラージュに魔力を込める

「（証明するんだ・特別な才能や、すごい魔力がなくなつて・・・）
」

「私はランスターの弾丸はちゃんとうちぬけるんだって！」

「クロスファイアシュート！！」

ティアナの弾丸がガジェットを次々破壊していく、しかし・・・

「え？」

軌道がずれた一発がスバルに直撃しようとしていた

スバルが直撃を覚悟した瞬間

——フュン

突然飛んできた金色のベルトによってスバルは守られていた、そし

てそのベルトはそのまま滑空して行き・・・W 幸太郎の腰に装備された

そして少し遅れてやってきたヴィータがティアナを怒鳴りつける

「ティアナ！このバカ！無茶やった上に味方撃つてどーすんだ！！」

「やかましいぞ、少し静かにしろ。」

「なっ！ジークお前っ・・・！！」

ヴィータはジークにも怒鳴ろうとしたがそれより先にウイングバツクルからミュージックホーンが流れる、そして腰の後ろに手を当てながらベルトのターミナルバツクルにセタッチさせる

「変身」

『W i n g F o r m』

鳥の翼象った形状のデンカメン

翼状のオーラアーマー

一瞬だけ現れたメカニカルなフォルムの翼

「降臨、満を持して！」

「「え！？」」

「おまえ・・・戦えたのか？」

ジークを怒鳴ろうとしていたヴィータもあまりの事態に怒りを失い、目を見開いていた

ウィング
WNEW電王の周りに無数のガジェットが近づいてくる

「我が刃の前にひれ伏せ！」

『Full Charge』

ウィング
WNEW電王がフルチャージしたデンガツシャー・ハンドアックスモードとブーランモードをガジェットたちに投げつけるとほとんどのガジェットが爆発した。ジークの必殺技『ロイヤルスマッシュ』である

「後はお前たちでやれ。」

ジークはそういうと幸太郎の体から出て行き、どこかへ行ってしまった

『Strike Form』

「え？ちよつと？今どうゆう状況？」

いきなりシャマルの持っていた薬に意識を封じられて目が覚めたら電王の姿になり、目の前では呆然としているスバルとヴィータ、そして若干泣きそうなティアナがいる状況に幸太郎はかつてない戸惑いを覚えた・・・

SIDE

???

私のせいでスバルが落ちるところだった・・・

私のせいでヴィータ副隊長を怒らせた・・・

完全に飾り物だと思っていたジークでさえあれほどの力を持っていた・・・

私は・・・私はっ！・・・・・・・・

???

SIDE OUT

「とにかくっ！お前ら二人ともすっこんでろ！バカ共！！」

ヴィータはそういうと一度言葉を切り

「行くぞ、幸太郎」

「えっ！あ、ああ。」

幸太郎と共に残ったがジェットを破壊しに行った

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おし、全機撃墜。」

「こっちもだ。」

「俺のほうも終わったよ。」

ヴィータ、エリオキャロのところにシグナムとザフィーラそしてす
でに変身を解除した幸太郎がやってくる

「ティアナは？」

ヴィータの問いにエリオが答える

「スバルさんと裏口の警備です。」

「そうか・・・」

「なあ、ティアナは一体何を焦ってんの？」

さっの戦闘を見ていない幸太郎でも、ティアナが普段から異常とも
いえるほど強くなるうとしていることが分かったそしてさっきのヴ
ィータの様子、幸太郎が状況を判断するには十分だった

「お前には話しておいたほうがいいか、じつは・・・」

そして物語は続いていく

電王の新しい翼 後編（後書き）

はやて「はやてと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「今回・私は存在する意味があったのだろうか・・・」

はやて「ああ、言いにくいことやねんけどな」

はやて「テディ次回も出番少ないらしい。」

テディ「！！！！！！！！」

はやて「しかもジークは幸太郎君に憑依して戦えることが分かったから、これからも・・・もしかしたら」

幸太郎「やめろ！！すでにジークのライフポイントは0だ！！」

はやて「ていうか、これって次回予告？」

戦いの理由

ガジェット破壊が終わり、機動六課へと帰還した後のとある森の中、一人の少女が自主練をしていた

「よう、もう4時間続けてるし、ちょっと休んだら？」

「幸太郎さん・・・見てたんですか。」

「いや、さっき通りかかっただけ。」

やってきた幸太郎がティアナに缶ジュースを投げ渡す

「ヴィータに聞いたよ、兄ちゃんのこと。」

「！！どうしてヴィータ副隊長がそのことを！？」

「前にたまたま聞いたらしい。」

幸太郎がティアナの横に座る

ティアナの兄ティード・ランスターは首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが10歳の時違法魔導師の追跡する際、対象の魔導師との交戦に敗れさらに無能な上司から

役立たず呼ばわりされたのだ

「あなたも兄さんは役立たずだと思うんですか？」

ティアナにそう言われて幸太郎は少し昔のことを思い出していた

「……祖父のことを弱者呼ばわりし、自分の強さを過信して敗れた自分自身を

「詳しいことはわかんないけど、アンタの兄ちゃんを役立たず呼ばわりした奴は哀れだな。」

「え!？」

思いもよらない幸太郎の答えにティアナは素っ頓狂な声を上げてしまっ

「俺も昔、一人の人を役立たずのつまない奴って思ってたことがあるんだ、ほら、俺って不幸だろ?」

「たしかに……」

? 別世界に来たその日に事件に巻き込まれる

? 作られて間もない隊舎のドアに挟まれる

? モモタロス ジーク 馬鹿に馬鹿を送られる

? ジークに憑依される

？ヴィータに殴られる

？劇薬の臭いをかぎ気絶

．．．．．なんか思い出したら若干、死にたくなつたよ．．

「で、それを全部その人のせいにして、自分は強いって思い込んだ。
た。」

「．．．．．」

ティアナは無言で幸太郎の話を聞いていた

「でも、結局は自分の弱さを思い知らされることになった、もし仲間が助けに来なかったら俺は殺されてた。」

「幸太郎さんは強いですよ．．少なくとも私みたいな凡人よりは．
」

ティアナは自虐的に言った、幸太郎はこれ以上言っても無駄と判断したのかその場から去ろうとしていた

「まあ、俺はアンタは間違ってるとは思わないし、むしろ理屈ばかり並べて何もしない奴よりはかなりいいと思うよ。でも一人で突っ走ってたら、いつか俺みたいな目にあうって言いたいよ。」

．．．．．

数日後

状況を簡単に伝えるならティアナが無茶をし、なのはに撃たれそうになっていた

「だから無茶すんなって言ったのに。」

「幸太郎、助けに行かなくていいのか!？」

デイが幸太郎にティアナを助けに行くように促す。しかし、

「お前も見ただろ。今回は全面的にティアナが悪いでしょ、一度痛い目見たほうがいい。」

なのはの攻撃があたった・・・と思われたが、ティアナは立っていたしかし、彼女のオレンジの髪には紫のメッシュがかかっており、さらに彼女の体からは白い砂がこぼれていた

「テディー!!」

幸太郎が指を二回鳴らすとテディの体はマチエーテディへと変わる

そして彼はベルトにライダーパスをセタッチする

「変身」

『Strike Form』

「なぜ、彼女にイマジンが!?!」

「多分ティアナの『強くなりたい』っていう意識を願いつて判断したんだ。」

「あたしらも行くぞ!」

「うん!」

NEW電王とヴィータ、フェイトはイマジンの元に進行して行った・
・・・・

(幸太郎はスバルの作ったウイングロードの上を走っている)

戦いの理由（後書き）

エリオ「エリオと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

エリオ「幸太郎さん・ティアナさんを助けに行きませんでしたね・」

テディ「だが、もしなのはさんが2発目を撃っていたら助けるつもりだったらしい」

エリオ「でも、なんか複雑な気分です。」

テディ「幸太郎は自分が悪役を買って出ることができるタイプですから。」

テディ「それより、何時^{いつ}ティアナにイマジンが？」

エリオ「ちなみに次回が終わったらまたギャグ路線に戻るそうです」
2人「では、さようなら」

特別アンケート（前書き）

特別大長編のコラボは仮面ライダーブレイドに決定しました！！
そして、今度もう一本書きたいとっていたものがオーズがダント
ツトップなので、それぞれの予告編を作ってみました。
また、感想をお聞かせください。

特別アンケート

？天の道を往き、総てを司る男の息子が主人公（カブト）

題名 天の道を往き、総てを悟る

・・・かつて、マスクドライダーと呼ばれた者たちの戦いから4年後の世界

「それじゃあ、そろそろ行くよ。今までありがとう、ひよりお姉ちゃん、樹花お姉ちゃん（同じ年だけど）、蓮華さん、加々美さん、そして・・・お父さん。」

黒い髪に身長は170cm後半くらいの青年がその場にいる皆に別れの挨拶をしていた

「もし、何か困ったことがあったらすぐに帰って来い、ボク達は何があってもおまえの味方だ。」

ひよりと呼ばれた女性が青年の肩を掴みながら力強く言う

「まあまあ、永遠の別れじゃないんだし、また会えるって!!」

樹花と呼ばれた女性はそう軽口を言う、しかし彼女の目にもうつすらと涙が浮かんでいた

「でも、本当に行っちゃうと思うとさびしいです・・・」

蓮華と呼ばれた女性は本当に寂しそうにつぶやいた

「でもな、別の道に行くからこそ『友達』らしいからな、だから今から俺たちは仲間じゃなくて友達だ。」

加々美と呼ばれた男性は青年の背中を軽く叩きながら言う

「おまえは俺の息子だ、おばあちゃんが言っていた、家族として必要なのは血ではなく魂だと……だから自信を持って行ってこい。」

そしてお父さんと言われた男、天道総司はかつて自分自身が言われた大切なことを息子に伝えていた

「はい、そうだ……お父さんが言っていた、俺は 天の道を往き、総てを悟る男……俺の名は天道総悟^{てんとう そうご}!!」

そう言いながら青年……天道総悟は目の前にある巨大な機械に入っていく、そして消えた……

……

「……それにしても、全てのゼクターを使うことができる、か……残酷だな。」

総悟が消えた後、加々美は軽く言っ たしかしそう言っ た彼の瞳はど

こか悲しさを秘めていた

「あの腐った『T2H計画』さえなかったら、俺が代わりに行くところだったんだが・・・」

「あいつが『大っ嫌いな自分の力を人のために使いたい』って言ったんだ、見送ってやるのが俺たち大人の役目だろ。」

加々美がそう言つと天道は目を見開き

「・・・まさか、加々美に説教されるとはな・・・明日は飴玉でも降るか？」

「降るかあ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「さて、着いたな。ここが滅びかけてる世界か・・・それにしても発達してるな・・・ところで、ここは何処だ？」

「・・・というか、君が誰なんかな？」

これが運命の出会いだった

？デイクイド版地獄兄弟のその後（カブト）

題名 悪い旅 地獄気分 なのはの世界

「・・・着いたよ、兄貴。」

「ここが次の地獄か・・・」

突然現れたオーロラから出てきた特徴的なカッコをした二人組が話していた

「あれ、兄貴なんか俺たち囲まれてるよ・・・」

「そうだな・・・」

彼等の周りには十数体の『ガジェットドローン』が集まっていた

「むかつくなあ 兄貴、こいつらやつちやおつよ」

そのとき不意にガジェットの一体が少し動いた

「・・・お前、今 俺たちを笑つたろ？」

言うが早いか兄貴こと矢車^{やぐるま}想は動いたガジェットに蹴りを入れていた

「行くぞ、相棒」

「兄貴となら何処までも」

そして矢車と相棒・・・影山^{かげやま}瞬^{しゅん}はバッタを模したゼクター『ホッパ
ーゼクター』をベルトにはめ込んだ

「「変身」」

「「Henshin」」

「Change Kick Hopper」

「Change Punch Hopper」

そして・・・彼等の姿はショウリョウバッタを模した

緑の体に、複眼の色は赤、足にはバッタの脚の形をした特殊兵装ア

ンカージャッキ

茶の体に、複眼の色は白、腕にはバツタの脚の形をした特殊兵装ア
ンカージャッキ

マスクドライダーキックホッパー

マスクドライダーパンチホッパーへと変わる

「なあ、生きてるって虚^{むな}しいよな・・・」

「お前たちも地獄を見せてやるよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここか！ガジェットが出やがったのは」

「はい、民間人は住んでいませんが生命反応が二つあります！」

「ちっ、急ぐぞ」

ところ変わって少し離れた場所、ガジェット出現情報を受けたヴィ
ータ、スバル、ティアナは人間が二人いると聞いて焦っていた。ど
んなに早く飛んでいても（比喻じゃなくマジで）二人の救出に間

に合わないのだ

そして、現場に着いた彼女たちは急いで反応のある方へと走った

「おい！無事かつ・・・で、おい 何だよ、これ・・・」

ヴィータ、スバル、ティアナは目を見開いた

そこにはまるで、数万トンの力で蹴ったか、殴ったかの形跡のある
ガジェットの残骸とそこに腰を掛ける2匹のバツタの怪物がいたのだ

スバルはその状況に軽い吐き気に襲われる

そしてそれに、緑の方のバツタが過剰に反応した

「貴様あ、今、俺たちを笑ったな・・・」

特別アンケート（後書き）

とりあえず、ここまでです。

本編もちやんと更新するのは是非、見てください
オーズ編の紹介はまた明日します。

では、是非、皆様のご意見をお聞かせください。

特別アンケート？（前書き）

アンケートはこれで最後です。
皆さんの意見をお聞かせください

特別アンケート？

？火野映司が主人公（オーズ）

題名 リリカルなのは 欲望のメダルと仮面ライダー

「どりゃああああ!!」

火野映司はいつものようにメダルの魔人『ヤミ』と戦い、そして勝利していた。

しかし彼が変身をとくと突然彼の体、謎の光に包まれた

「え、ちょっと ちょっと!」

「映司!!」

彼のパートナー？である、アークが彼の名を呼ぶが、その頃には彼の姿は完全に消えていた

.....

「あれ、ここは？真っ暗で何も見えないよ！」

映司が目を覚ますとそこは、真っ暗でどこまでも広がっている宇宙のような空間だった

「よお、起きたか。」

映司は声のしたほうを見たするとそこには自分と同じくらいの年の男性が立っていた

「君は・・・」

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ、そんなことよりお前にさつさと伝えなきゃいけないことがあるからしっかり聞け、『仮面ライダーオーズ』」

「・・・!!何でそれを」

「まあ、事情は大体分かってるから。それよりお前の世界に厄介な奴らが行ったせいでめんどくさいことになってる。お前は目を覚ましたら別の世界にいる、でもその間は俺と俺の仲間がお前の世界の『滅びの現象』を抑えておく。だから帰ってこれる機会がすぐに帰って来い」

そう言い終えると男の姿は少しずつ消えていった

「え、ちょっと待ってよ ぜんぜん訳わかんないし、それにどうしたら元の世界に戻るんだよ!？」

「・・・・・・・・ろの・・・・・・・・メル・・・・・・・・ボ・・・・・・・・え」

男の声はそこで途切れた

・・

「・・・・・・・・うん、ここは？」

映司は目を覚ますと驚愕した、明らかにそこは自分が元いた世界とは違う世界だからだ

「さっきの・・・・・・・・夢じゃなかったのか・・・・・・・・」

突然の事態に困惑する映司、そして彼は自分の手に握られているものに気付いた

それは・・・・・・・・・・・・・・・・

「俺の・・・・・・・・パンツ・・・・・・・・」

彼の手には明日はく予定だったパンツとその中に入れられた・・・

「うわっ！！何でこんなにたくさんコアメダルがあるんだ！！」

大量のコアメダルだった・・・・・・・・・・・・・・・・

特別アンケート？（後書き）

なのはまったく出ませんでした。が、連載になったたらちゃんと出します・・・

ゴメンナサイ

黒い影（前書き）

ここからは本編です。

特別アンケートのランキングも是非送ってください。

黒い影

「ティ、ア？」

スバルは突然雰囲気が変わったティアナに困惑していた

「とりあえず、貴様を殺せば契約完了だ。だからおとなしく殺されてくれ」

明らかにティアナのものではない声を発しながらティアナ・・・もといスパイダーイマジンはなのはを指差す

「でも、おまえじゃ無理」

そこにNEW電王に変身した幸太郎がやって来る

「幸太郎さん！！ティアは・・・ティアはどうしちゃたんですか！」

スバルが必死に声を出しながら問う

「多分、ティアナの『強くなりたい』って気持ちをイマジンが利用したんだ」

「貴様・・・電王か、ふふ 殺すのは貴様でもいいな。それに団長にいい土産ができる」

「みんな、とりあえずティアナからイマジンを叩き出すぞ」

「う、うん」

なのはも動揺しながらも武器を構える、傍にはヴィータとフェイトもいる

「フム、この小娘を人質にしてもいいが、それでは何時^{いつ}までも持つまい　ここはおとなしくこの小娘から出て行こう。」

スパイダーイマジンはその言う^{いう}とティアナの体から出て行き、NE W電王達から距離をとる

「スバルはティアナつれて下がってろ、あれはあたし達がやる」

「は、はい」

ヴィータがスバルに乱暴な口調で言う

スバルは落ちてきたティアナをキャッチし、おとなしく下がっていった

「なのはもだ」

「えっ！」

幸太郎の言葉になのはは小さな驚きを見せる

「何があつたかは知らないけど、伝えられる内に伝えないと大切な存在がいなくなつてからじゃ遅いよ」

なのははその一言で全てを悟った

「・・・うん、ありがとう幸太郎君。私も大切なこと忘れてたよ・・・」

なのははそう言つとスバルとティアナを追つて飛んでいった

「はあっ！」

NEW電王がマチエーデイの銃口からスパイダーイマジンに向かって弾を発射する

だがスパイダーイマジンはそれを軽くよけるとNEW電王に反撃をしようとする

しかし・・・

ソニック ムーブ

「遅いよ」

「なっ!!」

すばやく後方に回つたフェイトにヴィータの方に吹っ飛ばされてしまふ

「ん、あれスバル？・・・私は、確か・・・」

「ティアー、良かったー！！」

「わっ、ちょっと抱きつかないでよ、気持ち悪い」

「ティアだ、この態度はティアだ！」

「喧嘩売ってんの？」

イマジンに憑かれてからの記憶がないティアナにとっては今の状況はとてもめんどくさかった

「ティアナ」

「！・・・なのはさん」

なのはは全てを話した、自分が基礎しか教えなかった理由、自分が無茶をしたこと

そして・・・

「ティアナ、クロスミラージュちょっと貸してくれるかな？」

「あ、はい」

ティアナはクロスミラージュをなのはに手渡す

「システムリミッター、テストモードリリース」

はい

「命令してみて。モード？って」

「モード・・・？・・・」

セットアップ　ダガーモード

ティアナがそう命じると、クロスミラージュからオレンジ色の刃が現れ、接近戦に向いている形になった

「ティアナは執務官志望だもんね、個人戦のときのために用意はしてたんだ」

ティアナは遂にこらえ切れなくなりなのはに抱きついて泣いた・・・みんなが見ているにもかかわらず泣き続けた

そしてティアナが泣き止んだ頃

「よっ、落ち着いたみたいだな」

戻ってきた幸太郎がティアナに言う

「幸太郎さん・・・私、今さらですけど、幸太郎さんの言っていた事が分かりました。自分の目標のために努力することと、無茶することは別だったんですね。」

「さあ、なんだっけ？」

幸太郎は恥ずかしいのかそつぽを向いてしまった

そして、そのせいでなぜか落ちていた空き缶に足を滑らせ、派手にこけて大笑いされたのは別の話・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それにしても、見事にやられましたね。」

白衣の男が黒いイマジンに言う

「なあに、俺様の『悪の組織』はこれからが本番だ。電王とゼロノスそしてキバ！」

こいつらに復讐するまでは何度でも潰しにかかってやるさ。」

黒いイマジンはそのまま言葉を続けた

「おい、スカリエッティ お前の協力者の男がいただろ、あいつら少し借りるぜ」

「それは私ではなく、彼らに直接頼んでもらえるとありがたいんですが」

「へっ、そーかよ」

黒い影は着実に動いていた・・・・・・・・

黒い影（後書き）

キャロ「キャロと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「私の居場所はここだけだ・・・」

キャロ「テディさん、しっかりしてください！部屋の隅で体育座りしないでくださいよ」

キャロ「今回は遂に新展開、そして伝説の英雄達の出番も近い！？」

テディ「幸太郎が活躍しているのはうれしい、でもなんか寂しい・・・」

番外編 日常（前書き）

次の連載候補の現在の票は・・・

？天道総司の息子が主人公・・・2票

？地獄兄弟が主人公・・・0票

？オーズが主人公・・・3票です

まだオーズに決定したわけではありませんので『特別アンケート』
を見て是非感想を送ってください

番外編 日常

ティアナに憑いたイマジンを倒してから3日がたったある日……

「暇だな……」

「ああ、暇だ……」

幸太郎とテディは暇を持て余していた

「イマジンの情報は何か届いていないのか？」

「特にイマジンの情報もなければ任務も無いから言ってるの」

椅子に腰掛けながら軽くため息をついた

「そうか……」

「なあ、テディ」

「なんだ？」

幸太郎が切り出した話題は

「ヴィータってモタロスに似てないか？」

「ああ、確かに」

驚くほどどうでもいい話題だった

「怒りっぽいところとか、ジークとかティの呼び方までおんなじだし、それに赤いところかな」

「某、時を走る列車の中」

「ぶわつくしよおおい！！！」

「なんや桃の字、風邪か？」

「あれ？でも先輩^{バカ}って風邪ひかないはずじゃなかったっけ？」

「ああん、てめえ そりゃどーゆー意味だ？」

「つまり、先輩がバカってこと。」

「んだとお、このスケベガメ！！」

ドカツ、バキッ、グシャ、ドスン、「わーい、喧嘩だ 喧嘩だ」
ボキッ、バチイーン
ドスッ、ポキポキ、メキッ、オラァ、フン、ミシミシ、ドゴツ、ハッ、トリヤ、ベキッ

「機動六課」

「なにか、今聞こえたような・・・」

「気のせいだろ。それより、ずっとこうしてても仕方ないし、ちょっと散歩でも行くか」

「ああ、分かった」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ、幸太郎君どうしたの？」

「よお、なのは 別に特に用事は無いから散歩してるだけだけど」

「へえ そ、そうなんだ」
「だったら私も一緒に行っていいかな？」

その時のなのはの顔が少し赤かった事に幸太郎は気づいてなかった

「うん、別にいいよなデディ？」

「ああ、もちろんだ」

ここで、幸太郎の特殊スキル『祖父から忠実に受け継いだ不幸』発動！！

「野上！！こんなところにいたのか！？」

「へっ、シグナム？」

「さあ、私ともう一度勝負だ！！」

「デディ、この人は突然やって来て何言ってるんだ？」

「すまない幸太郎、私にも理解不能だ」

「お前との決着をもう一度しっかりとつけたいと思っていたのだ。そつだ、ジークを使ってもかまわんぞ」

結局この日は一日中シグナムに模擬戦（と書いた全力）に付き合わされる幸太郎であった

.....

「はあ、せっかく幸太郎君と二人　テディは空気で出かけられると思ったのに……」
シグナムさんてば……ま、でもまだまだチャンスはあるある」

休日と電王（前書き）

現在の票は

？ 2 票

？ 1 票

？ 4 票です

ちなみに、ブレイドが出てくる特別編は本編がもう少し進んだら公開します

それから少し時間がたち、幸太郎はテディ、守護騎士、隊長陣と共に食事をしていた

『……兵器運用の強化は進化する世界の平和を守るためである!!』

テレビでおっさんが何か言っている

「何だよ、この顔の濃いおっさん」

幸太郎が皮肉たつぷりにテレビのおっさん……レジアス・ゲイズ中將に言う

それがツボだったのか、ヴィータが口に含んでいたスープを幸太郎に向かっておもいきり吹いてしまった……

「熱っちいいいい!!!!」

「幸太郎……ゲホッ　ゲホッ……スープ飲んだときに笑わせんなバカ!」

「すみません! 幸太郎の運の悪さは最近また、最悪ゾーンに突入してるので」

テディがヴィータの背中をさすりつつ幸太郎の顔を拭きながら言う

「そういえば、幸太郎はその後どうするの？」

復活した幸太郎にフェイトが聞く

「ああ、スバルやティアナが町を案内してくれるって言うから、イマジンの情報集めも兼ねて出かけるよ」

「へえ、私はお仕事あるから行けないな、残念」

なのはが小さくため息をつきながら言う

「あ、もうこんな時間か。行くぞ、テディ」

「ああ」

「「「「「行つてらっしゃい」「」「」」

「うん、行つてきます」

「それでは、行つて参ります」

テディが敬礼する

[illegible]

「あ、幸太郎さん　こっちです!!」

「ちょっと叫ばないでよ恥ずかしい」

「よ、じゃあ俺達はティアナの後ろ付いてけばいいんだな」

「はい、じゃあ行きましょーうか」

ティアナとスバルは知り合いから借りたバイクに
幸太郎とデイはデンバーに乗って町に向かった

バイクで向かっている最中ティアナがふと、何かを思い出したよう
に幸太郎に問う

「そういえば、幸太郎さんって17歳ですけど、免許持ってるん
ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「幸太郎さん？デイ？え、ちょっと・・・まさか・・・」

結局そこはそれで降触れられないままだった

・・・・・・・・・・・・・・・・

「スバル、それ、何なの？」

「何言ってるんですか幸太郎さん、アイスですよ」

幸太郎がゆつくりとティアナに視線を向ける

ティアナは黙って頷くことしかできなかった

なぜなら、今スバルが食べているアイスは・・・2段や3段ではなく、数えるのもめんどくさいアイスの山だったからだ

それから、少し歩いたところで結構大きな人ごみができていた
幸太郎はそこで準備中の司会のような人に聞いてみた

「あの、ここでも何かあるんですか」

男は笑顔で答えた

「ああ、ここでもうすぐ俺が司会の『路上、歌唱大会』があるんだ。
参加は自由だから君も出てみるか？」

「いや・・・俺はあんまりそういうのは・・・そうだ、こいつに
似た変なの見かけませんでしたか？」

幸太郎がティディを指差しながら言う

「あゝ！！見たよ」

「本当ですか！？」

男の答えに驚いたのはスバルだ

まさかこんなに簡単に手掛かりが見つかるとは思わなかったのだ

「その話、詳しく聞かせてください」

幸太郎が男に問い詰める

「うーん、じゃあ大会に出てくれたら教えてあげるよ」

「出ます!!」

幸太郎がそう言つと男はうれしそうに去つていった。幸太郎をエントリーしに行った様だ

「すごい!! 幸太郎さん もう手掛かり見つかるなんてついてますね!!」

スバルが幸太郎に言う

「あ、君! じゃあもうすぐだから来てくれ」

「はい、行くぞデイト!」

「え!? 私も?」

「当たり前だろ」

そして幸太郎も去つて行き、大会が始まった

「それにしても、幸太郎さんの歌なんて聴いたこと無いけど、どうなのかしら？」

「私は上手だと思っけどなー」

そして幸太郎とテディの出番が来た、幸太郎の実力を疑っていたティアナは数十秒後に驚愕することになる

伴奏が流れる・・・

「未来に居る 俺が見れば 今の自分は多分
考え無し ただ無邪気 愚かに見えるかも」

「Right Now」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「こぼれ落ちる砂のように この手から消える前に
動きだそうぜ Double - Action
俺が 私が 二人で・・・」

「二つの声重なる時 最高に強くなれる
ずっとずっと Double - Action
気持ち 二人 誰にも止められない」

少したってから伴奏が終わる

スバルとティアナは開いた口が閉じなかった

「幸太郎さん、たぶん上手だろうなあとは思ってたけど・・・」

「ティティまで・・・ここまでなんて・・・」

ティアナは幸太郎の歌唱力よりティティの歌唱力にショックを受けていた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやあゝ、君達すごいね！文句なしの優勝だよ！」

「それより、こいつに似てるのって・・・」

「ああ、そうだったね確か・・・」

『俺様の悪の組織に入りたい奴は付いて来い』とか言ってた黒いのがさつきその辺を・・・」

男の話を聞いて反応したのはティティだった

「幸太郎・・・まさか・・・」

「いや、あいつはじいちゃん達が倒したはずだ」

「幸太郎さん、『あいつ』って・・・」

スバルが聞きかけたところでティアナに通信が入った・・・

休日と電王（後書き）

リイン「リインと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「・・・なぜか、あなたには私に近いものを感じる・・・」

リイン「テディちゃんはまだいいほうです・・・私なんて3、4行くらしいか」

テディ「次回・・・さらに人増えますね・・・」

リイン「そうですね・・・」

謎の少女と炎の心 前編（前書き）

スイマセン

今回PCの調子が悪くて短めです

謎の少女と炎の心 前編

「エリオー！キャロー！」

スバルが二人の名を呼びながら近づいていく

「スバルさん、ティアさんそれに幸太郎さん、デディ」

「この子が通信で言ってた子が、ずいぶん小さいな」

幸太郎がボロボロになった布をまとった少女を見ながら言う

幸太郎が男から話を聞き、そのまま調査を続けようとしていたとき、ティアナに通信が入った

内容はロストログアを持ったボロボロの少女を保護したことだった

「みんな！！」

そして、そこから少し時間を置きなのは達が到着し、シャマルが少女の様子を見ていた

「・・・うん、大丈夫とくに体に異常はないし危険な反応も無いわ」

「じゃあ、この子は私達がヘリで搬送するから皆はこのまま現場調査をおねがいね」

「」「」「はい」「」「」

少女に危険はないとシャルが判断し、なのは達は少女を抱いてそのままへりに戻っていった

「じゃあ皆、気合入れていくわよ！」

ティアナがそう言うと、フォワード陣は自分のデバイスを

幸太郎はNEWデンオウベルトにライダーパスをセタッチさせる

「セツトアップ!!」

「変身」

『Strike Form』

「レディ・・・ゴー!!」

.....

動体反応確認。ガジェットドローンです。

キャロのデバイス『ケリユケイオン』が静かに告げる

「来ます！ガジェットです！！」

キャロの声を聞き構えるメンバー達

「来た！」

ガジェットが姿を見せると同時にティアナがガジェットの軍団を撃つ

しかし、AMFという魔力を無力化させるバリアのせいであまり効果はなかった

だが、幸太郎は別に魔術師ではないので・・・

「はあっ！！」

5、6体のガジェットを倒す程度1分もかからなかったという・・・

「ま、こんなもんか」

ガジェットを全て倒したことで気を抜く幸太郎。それが悪かった

ドカアアアーン!!

何かが壁（もちろん 幸太郎がもたれかかっていた）を破壊して
スバルたちに近づいていった

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

スバルに近づいていった何か・・・それはスバルの姉、『ギンガ』
だった

「いつしよに行きましょう、ここまでのガジェットは大体叩いてきたから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エリオとキャラ口は呆然としていた・・・

ギンガのことともそうだが

それ以上に、その後ろで目を光らせているの幸太^{あぐ}郎^まに……

「……誰だか知らないけど、バカにしてくれんじゃん」

「え！あの、あなたは……」

「民間協力者の幸太郎さんだよ」

「その、幸太郎さん？私何かしましたっけ？」

プチッ（幸太郎の何かが切れた音）

「まあ、でもいつものことですよ」

バチバチッ・ガシン（幸太郎がデンガツシャーを組みたてる音）

ここから幸太郎の怒りを静めるのにはガジェットを倒す以上に手間取ったという……

……

「ん？おい、アレ！」

幸太郎が悪魔になってから少し進んだ場所で怒りを静めた幸太郎が驚愕の声を上げた

そこにはロストロギア『レリック』の入ったケースを持った紫色の髪の少女がいた

だが、彼女の様子が変わった……

彼女は自分達に気が付いていないのか、彼女の横の護衛のような黒龍に話しかけていた

「ねえ、ガリユー……ゼスト一体どうしちゃったのかな……アギトもいなくなっちゃうし……」

『ネガタロス』に会ってから皆、なにか変……」

少女の呟きは幸太郎たちには聞こえなかった……

謎の少女と炎の心 前編（後書き）

ギンガ「ギンガと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「すみませんでした幸太郎も最近溜まっていたストレスが爆発したようで」

ギンガ「ああ、いえ悪いのはこちらですから」

テディ「いえ、しかし・・・」

ギンガ「まあ、そんなことより次回は超意外人物が仲間入り!？」

謎の少女と炎の心 後編

幸太郎たちは現在、ガリユーと呼ばれた黒龍と戦っていた

「ハアッ!」

ギンガがガリユーに接近して格闘し、吹っ飛ばされたところでNE
W電王がマチエーディでガリユーを撃ちまくった

やはり、NEW電王+フワードメンバー&ギンガが相手ではガリ
ユーも苦戦していた

その時・・・

「どおりやああ!」

バッコーン!!

リインフォース?を連れたヴィータが天井を破壊し、援軍にやって
きた

「吹っ飛べー!」

そしてそのままガリユーを文字通り吹っ飛ばし、スバルたちの前に

立つた

「悪い、遅くなったな」

「あ、あははは・・・やっぱ副隊長強い」

ヴィータの吹っ飛ばし跡を見たメンバーは苦笑いするしかなかった

「ん？おい、幸太郎は？」

ヴィータが突然そんなことを言い出した

「え、幸太郎君ならさっき私と一緒に・・・」

ギンガがそこまで言ったところで言葉に詰まる・・・

確かにさっきまでいたはずの幸太郎がいないのだ

「えーっと、その・・・言いにくいんですけど・・・」

「リイン、何か知ってんのか？」

「実はさっき・・・」

・・・

「吹っ飛ばー！」

ってヴィータちゃんが言っ
てあの黒い龍を吹っ飛ばしたとき

ん?

ちよとどその吹つ飛び先にいた幸太郎ちゃんが……

「うっそおおおおお!!!」

一緒に星様に・・・

•

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・全員!!」

『・・・・・・・・はい』

「幸太郎に黙禱^{もくとう}！」

ジイイイ

「なんだよ！そんな目であたしを見んな!!」

「だって・・・・・・・・ねえ？」

「悪いのはあの不幸太郎の方じゃねえか！チックシヨオオオオオオ
!!」

ヴィータ、ダッシュで逃走。

「幸太郎おおおおお!!!!」

テディ、幸太郎さがしの旅に出発。

「ってあれ？あの女の子は？」

あ！！

[illegible]

「いつてええええ」

その頃、吹っ飛ばされた幸太郎はどこか人気の無い裏路地まで飛ばされていた

「やっぱ、早く戻らないと・・・」

幸太郎がその場を立ち去ろうとしたとき、視界の端の方に何か赤いのが見えた

「ん？……っておい、大丈夫か！！」

それはよく見たら人だった……

だが、普通の人間よりも明らかに小さく、リインぐらいのサイズだった

「うつ・・・なんだお前・・・？」

ボロボロになつてゐる妖精よりもどちらかと言つと悪魔を連想させる小さいのは苦悶の表情だった

「俺は幸太郎、それより待つてろ、すぐに機動六課に運んでやるから！」

幸太郎の言葉を聞き、一瞬怖い顔になるが、すぐにその表情は消え

「この際、管理局でも何でもいい・・・頼む、旦那を助けてくれ！」

「え！？」

幸太郎はそこから少し、小さい奴の話を聞いた名前は『アギト』といい、どうやら管理局とは一応敵対関係らしい

「それで・・・あたし等のところに黒い鬼みたいなヤツが来たんだ・
・旦那がそいつと2人で話したいって言つから・あたしは旦那を待つてたんだ・・それなのに・・それなのに！！旦那が帰つてきた頃には旦那はもう旦那じゃなかった！！！」

「どついうことだ！？」

「旦那の性格ががらりと変わつて、それであたしはあの黒いヤツに問い詰めたんだ・・・そしたら旦那があたしに・・・・攻撃を・

・・・」

アギトは泣いていた、そして幸太郎はその事態に心当たりがあった

「アギト、多分だけどそのダンナはイマジンに憑依されてる」

「イマジンは知ってるけど・・・憑依？・・・どうゆうことだ！？」

「イマジンは他人に憑いて、その体に乗っ取る能力を持ってるんだ・・・でもお前の旦那は絶対に助けてやる！！」

幸太郎は力強く言った

「本当か・・・でも、あたし等は敵同士なんだぞ、なんで・・・」

アギトがそこまで言ったところで幸太郎が口を挟む

「俺も！！」

「俺もおんなじだったんだ、ずっと傍にいてくれると思ってた大切な存在がある日突然いなくなって・・・でも、やっぱり大切だからこそ傍にいれなくなっただけ、最後はまた一緒になれたから・・・」

「

「さあゝて、いい話はそこまでだ」

「「！！」」

幸太郎とアギトが振り返るとそこにはアルマジロを模したイマジン・・・『アルマジロイマジン』がいた

「団長がお前、目障りだから消せってさ」

アルマジロイマジンはアギトを指差しながら言う

「アギト、逃げてくれ」

「えっ・・・ちょっと待てよ、お前はとうするんだよ!？」

「あいつを倒す・・・変身」

『Strike Form』

「お前のダンナは必ず助けに行くから・・・今は逃げて!」

「・・・管理局なんて大っ嫌いだけどよ、アンタは、アンタだけは別だ・・・あたしも戦うぜ

『兄貴』!!!」

そう言いながらアギトが幸太郎に近づく、そして・・・

『Heat Form』

謎の少女と炎の心 後編（後書き）

テディ不在

スバル「スバルと」

ティアナ「ティアナの」

2人「次回予告コーナー」

スバル「3人・・・帰ってこないね」

ティアナ「ま、そのうち帰ってくるでしょ」

スバル「いや、でもテディは幸太郎さん見つけるまで帰ってこないよ」

ティアナ「ん？」

スバル「どしたの、ティア？」

ティアナ「さつき一瞬電車みたいなのが見えたんだけど・・・」

スバル「こんなところに電車が来るわけ無いじゃん、ティアったら」

ティアナ「そうよね」

新しい希望（前書き）

いつも感想を書いてくださる

断空我さん

ツカサさん

ありがとうございます！！

皆さんも是非感想としどし送ってください

要望はできるだけ取り入れますので

あと事情があつて今回、短いです・・・

新しい希望

『Heat Form』

NEWデンオウベルトから流れる音声と共にNEW電王にアギトのオーラをフリーエネルギーに変換した鎧が現れる

燃え盛る炎のようなデンカメン

赤を基調としたボディに

肩から落ちるコウモリの羽のようなマント

NEW電王、ヒートフォームへと幸太郎の姿は変わった

「うわっ！どうなってんだコレ！？」

アギトが驚愕の声を漏らす

「ユニゾンだったっけ？電王の力ってイマジン以外でもつかえたんだ・・・」

NEW電王の中から幸太郎が感心したように言う

「アギト！体の主導権はお前だから頼んだぞ！」

「ええっ！！ちょっと待ってくれよ兄貴！」

「いつまでゴチャゴチャやってんだあ！！」

アルマジロイマシンがHNEW電王^{ヒート}に拳を振るうが、HNEW電王^{ヒート}はそれをすばやく避け、『デンガツシャーランスモード』を組み立てる

「アタシの怒りの一撃!!」

アギトの声と共に炎をまとったデンガツシャーがアルマジロイマシンを刺す

しかし・・・

「そんなしょぼい攻撃が効くかよ!!」

イマジンの中でも防御力が高いアルマジロイマシンには効果が薄かったが

「蒸し焼きだ!!」

そのままデンガツシャーの先端に炎を集中させ、文字通りアルマジロイマシンを蒸し焼きにする

「熱っっ!ちよっ!!熱い熱い!!聞いてないよこんなの!!!!」

アルマジロイマシンは熱さのあまりコワレテシマッタ

「兄貴、このまま決めるぜ!!」

HNEW電王^{ヒート}はNEWデンオウベルトのターミナルバックルにライダーパスをセタッチする

『Full Charge』

「おつりやああああ!!!!」

そして、アルマジロイマジンはそのまま燃やされて灰になった・・・

・・・

「で、さっきのなんだったんだ兄貴？」

アギトが幸太郎に問う

「ああ、さっきのは・・・

幸太郎が電王やフリーエネルギーについて説明する

「なるほどねえ　ま、なににせよこれからもよろしく頼むぜ兄貴」

ちなみにアギトは幸太郎を認めたらしく、彼を兄貴と呼び、ゼストを救うまで行動を共にすることになった

それから少し時間がたった頃、フォワードメンバーはヴィータと謎の少女の捕獲に成功しており、少女を連行しようとしていたが、少女が不意に口を開いた

「逮捕はいいけど・・・大事なヘリは、ほっっておいていいの・・・？あなたはまた、守れないかも」

ヴィータがその一言に過剰に反応した

「てめええええ！！」

ヴィータが少女の胸倉を掴む

「ちよっ・・・ヴィータ隊長、落ちっ・・・」

「うるせえ！！」

スバルの言葉を一蹴するヴィータ

その時……

「エリオ君！後ろ！」

「え？」

ギンガがエリオに忠告すると同時に

「いただきっ」

「うわっ！！」

エリオの足元から突然女性が現れ、ケースと少女を連れ去っていった……

一方その頃

「ヘヴィバレル……発動」

シャマルと謎の少女を乗せたヘリに砲撃を撃つ準備がされていた

そして直撃した……

「どう？この完璧な計画」

紫の髪の少女に言葉を言わせていた本人・・・スカリエッティのナンバーズの4『クアットロ』は満足げに微笑んだ

「だまって 今、命中確認中」

同じく砲撃を打った本人・・・スカリエッティのナンバーズの10『ディエチ』はうつとうしそくに言った

「あれ？まだ飛んでる・・・！」

砲撃が直撃したはずのへりが飛んでいることに、驚愕の声を漏らす
ディエチ

「ん？」

へりの近くで誰かが何かを言ってることに気づいたディエチはその言葉を解析する

『俺、参上！！ 俺、最強！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

「すまねえ、召喚師には逃げられてケースも奪われた・・・逃走経路も掴めねえ」

ヴィータが今回のことを報告していた、ヘリが無事だったことを聞いて落ち着いたようだ

「あの〜ヴィータ副隊長・・・」

スバルがおずおずとヴィータに話しかける

「なんだ！？今報告中だ！」

「いや、実はレリック・・・取られてないんですよ」

「は？」

呆然とするヴィータ

スバルが言葉を続ける

「実はこんな時のためにレリックそのものに嚴重封印を掛けて別の所に保管しておいたんです」

新しい希望（後書き）

アギト「アギトと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「どちら様？」

アギト「いや、テメエこそ」

テディ「幸太郎、詳しく説明してくれ」

アギト「そうだよ兄貴、この珍獣は何なんだよ？」

幸太郎「次回、少女の正体判明」

2人「（無視された・・・orz）」

もう一人の電王（前書き）

次の連載は

仮面ライダーオーズに決定しましたああ！！

TV版がもう少し進んだら連載します

そしてブレイドが出てくる特別編はNEW電王の次のフォームが出たら発表します！

皆様、これからもよろしくお願いします

（作者の原動力は感想です、皆さん是非感想を送ってください）

もう一人の電王

「俺、参上！！俺、最強！！」

S I D E

シャル

・・・私は今、困惑しています。

「ん？何ジロジロ見てんだ？」

私達が乗っているヘリに謎の砲撃が撃たれ、直撃すると思った瞬間。

幸太郎君の電王に少し似ている赤い電王が砲撃を防いでくれました

「あの、もしかして幸太郎君の・・・」

「何！？お前幸太郎知ってんのか！？」

「えっと、一応彼の仲間というか協力者というかなんですけど」

「おお、そりやちょうどいいじゃねえか。おい、良太郎」

赤い仮面の人・・・とりあえず電王さんと呼ぶことにします

電王さんはさっきから独り言をブツブツと呟いています

「おい、お前」

「は、はい！」

「俺達を幸太郎のところに連れてけ」

そう言いながら電王さんはベルトをはずそうとします

「あ！次の攻撃が来るかもしれないので、できればそのままでお願
いします」

「ああ？つたくめんどくせえな」

ヴィータちゃんと気が合いそうね・・・この人

シャマル

SIDE OUT

「はあ・・・はあ・・・ヴィ、ヴィータ副隊長・・・テディと幸太郎
さん発見しました・・・」

走り回って幸太郎とテディを探していたスバルが息を切らしながら

言う

「よし、よくやった……さあ、レリック吐け天井!!」

ヴィータがディをブンブン揺らしながら乱暴に言う

「ちょ、待って……他にイロイロな物まで出てっ!!……」

ちなみに幸太郎は……

「幸太郎さん、この子どうしたんですか!？」

アギトのことで質問攻めにされていた（アギトは疲労により爆睡中）

ピーピーピー

ディがレリックとイロイロな物を吐き出した後、ヴィータに通信が来ていた

「はい、こちらスターズ2。ってシャマルか……え……うん……
・何い!!??」

ヴィータの驚きように何かあったのかと心配するメンバー……

そして、通信が終わり

「おい、幸太郎……落ち着いて聞け……」

「な、何……?」

「じいちゃん!!」

「よお、幸太郎。元気そうじゃねえか」

集合場所には幸太郎、テディ、ヴィータ、シャマル、なのは、フェイト、はやて、シグナム、そして電王がいた

「じいちゃん、何で変身してんの？」

「おっと、そういやそうだった」

そう言いながら電王の中から赤いイマジン『モモタロス』が出てき、電王は『プラットフォーム』になる

『うおっ!!』

その場にいたほぼ全員がその姿に驚く……が

「（ふっふっふっ、その程度のことではもうウチは驚かんで・・・
幸太郎君が来てからこの程度なれたわ！！）」

約一名だけ笑顔だった

そして次はP電王^{トキシノ}がベルトを取る

そして現れたのは14歳くらいの少年だった

「うそおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！」

叫んだのははやてだ

「だ、大丈夫ですか、主ははやて？」

シグナムがはやてを心配しながら近寄る

「でも、幸太郎君がメツチャ強いじいちゃんや言っからウチは亀〇
人みたいなんを想像してたのに、まだ子供やないか！！！！」

はやてのテンションはモモタロスですら若干引くほど上がっていた。
・

「でも、じいちゃんこう見えてもなのは達と同じ歳だぞ」

『うそおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！！！！！！！！！！』

全員、某ゆづくんと同じ反応でした。

やがて全員落ち着いた頃

「えっと・・・野上良太郎です。幸太郎がお世話になってます」

「時空管理局機動六課部隊長、八神はやてです。先程は失礼しました」

「こっちは僕の契約イマジンのモモタロスです。ほら、モモタロス挨拶しなきゃ」

良太郎が暇そうに寝転がっていたモモタロスを起こそうとする

「一度しか言わねえからしっかり聞けよ、俺はモモタロスだ！」

「すげえセンスだな」

ヴィータがモモタロスの姿を見ながらバカにしたように言う

ここから

ヴィータVSモモタロス

第2回

『頭がアレな子』選手権！

と

良太郎がOrzになったことは言うまでもない。

「じゃあそろそろ真面目に話そうか・・・」

『（怒ってる！？）』

いい加減イライラしてきたのはにより話が進むことになった

「まず、僕たちがこの世界に来た理由だね」

「おい、幸太郎 おっさんから俺達は別件で動いてるって聞いたな？」

「うん、だからこの世界に紛れ込んだイマジンは俺に頼むって」

モモタロスの問いに幸太郎は答える

「実は僕たちのパスの予備がまた盗まれたんだ！」

「パスとは幸太郎が変身するときに使うあのパスか？」

シグナムが良太郎に確認し、良太郎は頷く

「それで、俺達はパスを盗んだヤロウを探してたんだ」

「ネガタロスだろ」

「!!! 知ってたの!？」

良太郎が幸太郎に詰め寄り、少したじろぐ幸太郎

「こっちで俺もイマジンの情報を集めてたんだけど・・・やっぱか・・・」

幸太郎は今まで集めた情報から分析してみたが・・・最悪な予想が当たってしまったことに落ち込む幸太郎

「でも、2人ともパスを持つてるんだったら予備を奪われても問題ないんじゃないですか？」

シャルが良太郎に質問するが

「パスを持つてるのが普通の人ならね・・・でも、イマジンの目的は時間を壊すことなんです」

「・・・イマジンに時間を自由に越えさせたら、何しでかすか分からんちゅうわけか」

はやての答えにまたも黙って頷く良太郎

「僕たちは幸太郎たちとは別のルートで情報を探してみるから何か分かったら、また連絡してね」

「コレで、だろ」

そう言いながら幸太郎は良太郎に手に持っていた物を見せる

それは・・・・・・

.
藍色のケータロスだった

もう一人の電王（後書き）

モモタロス「モモタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

モモタロス「来たぜ、来たぜ、来たぜえ！ついに俺の出番だあ！！」

テディ「そんなことより、今回で謎の少女の正体を明かせなかった

こと全力で謝ります！！」

モモタロス「んな細けえ事、誰も気にしてるわけねえだろうが」

テディ「いや！！幸太郎が言ってしまった以上責任がある！」

モモタロス「次回、俺の出番だけでクライマックス！！」

テディ「これ以上嘘をつかないでくれ！！」

子供（前書き）

前回、感想を書いてくれた

疫病神さん

門矢光さん

断空我さん

ボンチューさん

仮面ライダーディケイド神さん

ありがとうございました！！

これからも是非よろしく願います！！

感想お待ちしております

子供

幸太郎が良太郎に会った翌日

「幸太郎君、これから昨日の子のところに行くんだけど、一緒に行かない？」

なのはが幸太郎をとびっきりの笑顔で誘っていたが・・・

「ああん？ テメエ・・・兄貴に話し掛けたいんなら、まずアタシを通してからにしやがれ！」

アギトの妨害を受けていた（アギトの存在は幸太郎と本人の要望により、上層部には隠されている）

そう、アギトは昨日から幸太郎に近づく女性を24時間体制で脅して、誰も幸太郎に近づけないようにしていたのだ。だが・・・

「幸太郎君のことはあまり公にはされてないんだけど、そこにいるシスター・シャツハって人には話してあるの」

なのはは完全に無視していた

「おい、コラ、無視すんじゃないやねえ！」

「俺は特に用事ないしいけど、俺まで行く必要あんの？」

「そこは気にしちゃ駄目なの」

「そ、そう・・・。」

「アタシは行かねーからな!!」

「・・・なるほど。それで幸太郎までいるのか」

「うん。ところでシグナム」

「何だ？」

「俺の呼び方変えた？」

「野上だと良太郎と区別しにくいからな。嫌なら元に戻すが？」

「いや、別にいいよ」

現在、幸太郎、テディ、アギト、なのは、シグナムは昨日保護した子供の所へと向かっていた

「それより、すみませんシグナムさん。車出してもらっちゃって」

なのはがシグナムに付いて来てもらったことに謝っていた

「気にするな」

シグナムが言い終わると同時に通信が入った

『騎士シグナム 聖王教会シャツハ・ヌエラです！すみません、こちらの不手際があつて……。検査の合間にあの子が姿を消しました』

幸太郎たちが到着してすぐに通信をしてきた、シャツハがやって来た

「申し訳ありません!!」

「状況はどうなってますか？」

なのはがシャツハに訊ねる

「はい…。特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないんだよね？」

今度は幸太郎が訊ねる

「ええ」

「じゃあ私と幸太郎君、シグナム副隊長とシスター・シャツハとデイチヤンで分かれて探しましょう」

ちなみにここで自分と幸太郎をチョイスしたのはわざとだ

幸太郎となのはは裏庭の方を探しながら少し話をしていた

「人造生命体？」

「うん、人の手で造られた命・・・でも、生きてることには違いなの！！」

気づけばなのはは自分でも驚くほどに強く言っていた

自分の親友のことであつて、幸太郎に人造生命体を否定されたくないのだ

そして、幸太郎の出した答えは・・・

「そんなのあたりまえじゃん。それより、早くあの子見つけないと」
全く『人造生命体』というものに抵抗がなく、変に過保護に扱うわけでもなく、ましてや化け物扱いすることもなく、ごく自然に一人の『人間』として扱っていた

なのはは一瞬、ハトが豆鉄砲をくらったような表情になったが、やがて笑顔になった

「（・・・やっぱり、幸太郎君は運が悪くても、口が悪くても・・・優しくて、カッコイイの・・・）」

ガサッ

「ん？」

幸太郎たちが音のした方を向くとそこには昨日助けた少女がウサギの人形を持って、怯えたようにコッチを見ていた

「何だ、こんな所にいたのか」

幸太郎が少女に近づいていく

その時……

「逆巻け、ヴィンデルシャフト！」

「は？」

幸太郎が上を見るとシャツハが武器を持って降ってきた……幸太郎の上に

「あれ？……ああああっ！！申し訳ございません！！」

シャツハがピクピク痙攣けいれんしている幸太郎を起こし、謝罪する

「大丈夫ですかあゝ！！目を覚ましてください！！」

野上幸太郎、享年17歳 死因『不幸』

少女はそれを見て涙目になってしまった

そして、後ろでコントしている二人を置いて、少女に近づく

「大丈夫？ごめんね、驚かせちゃって。私は高町なのはっていいます。お名前言える？」

「・・・ヴィヴィオ」

「かわいい名前だね、ヴィヴィオどこかに行きたかったの？」

「ママ・・・いないの」

その言葉を聞き、一瞬悲しい顔をするのは

「へえ、それで自分で探そうとしたのか・・・結構根性あるじゃん」

復活した幸太郎（若干ボロボロ）がヴィヴィオの頭をなでる

すると、泣きそうだったヴィヴィオがどんどん笑顔になった

幸太郎が手を離す

ヴィヴィオ再び泣きそうになりながら、幸太郎の手を掴み自分の頭に乗せる

幸太郎なでる「ヴィヴィオ笑顔

幸太郎離す「ヴィヴィオ再び泣きそうになりながら、幸太郎の手を掴み自分の頭に乗せる

2行、上に戻る。

しばらくして、フェイトとはやてから通信が入った

そこで、はやてたちがモニターで見たのは

『うわあああん！！やだあ！！行っちゃやだあ！！！！』

なぜか若干ボロボロの幸太郎と困った表情のなのはと二人に抱きつきながら泣き叫ぶヴィヴィオと必死にそれをあやすフォワードメンバーだった

『おい、テディ！！じいちゃんに連絡してリユウタロス呼べ！』

『それならウラタロスの方が女性に強いんじゃないか？』

『あいつは、駄目だ！教育上、一番の有害物質だ！！』

『二人ともわけの分らないこと言っていないで、手伝ってください
！』

ティアナに至っては若干、切れていた

「何なんや、この混沌・・・」

子供（後書き）

ヴィヴィオ「ヴィヴィオと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

ヴィヴィオ「・・・怖い」

テディ「ガーン」

アギト「このクソガキンチョ！！兄貴になでてもらってんじゃんね
ー！！」

ヴィヴィオ「ひっ！」

テディ「ちょっと、やめてください！」

幸太郎「何、このカオス・・・」

降臨、満を持して！！（前書き）

クリスマスに出かけたり、友達とWとオーズの映画見に行ったりで更新遅れてごめんなさい

それと、前回感想を書いてくださった

皆大好きさん

断空我さん

疫病神さん

門矢光さん

ボンチューーさん

ありがとうございます！！

これからもよろしく願います！！

感想お待ちしております

降臨、満を持して！！

「降臨、満を持して！！」

「本当に久しぶりだな、ついでにこの状況でわざわざ状況をややこしくするな」

幸太郎たちが必死にヴィヴィオをあやしていると、突然どこから沸いてきたのかジークがやって来た

「何を言う！！我が兄弟のこともあって私は子供の扱いが得意だ！！」

「はいはい、ちよいどいて」

もう完全に邪魔でしかなかったジークを押しつけ、フェイト、はやてが部屋にやって来た

「エースオブエースと電王にも勝てへん相手はおるもんやねえ」

「（フェイトちゃん、はやてちゃん、助けて〜）」

なのはが念話で二人に助けを求める

「ふっふっふっ、まあここはフェイトちゃんに任しとき」

「はやて、どういうこと？ついでに、ジークは本当に一体何がしたかったんだ？」

幸太郎が二つの疑問をぶつけるが、はやては黙って笑っただけだ

そして、フェイトが泣き続けているヴィヴィオに近づく

「こんにちは、この子はあなたの友達？」

フェイトがヴィヴィオの落としたウサギの人形を拾いながら言う

「ヴィヴィオ、こちらフェイトさん。なのはさんの大事なお友達」

なのはがフェイトを紹介する

「ヴィヴィオ、こちらジーク。バカの代名詞」

幸太郎がジークを罵倒する

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「小僧、我が前にひれ伏せ」

フェイトとジークが続ける

「ヴィヴィオはなのはさん達と一緒にいたいのか？」

「お前を我がお供その五に任命してしんぜよう」

ヴィヴィオが答える

「……うん（フェイトの方だけを見て）」

フェイトとバカが再び話しかける

「でも、なのはさんと幸太郎、大事なご用でお出かけしなくちゃいけないの」

「ふむ、なかなか見所がある。家臣一同！！この小僧を見習うが良
い！！」

「もういいから黙れ。」

上の一言は誰が言ったか分からないが、全員の共通意識だ

「ほら、ヴィヴィオがわがまま言うから困っちゃってるよ、この子
も」

フェイトがウサギのぬいぐるみをヴィヴィオに見せる

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね」

「……うん」

ヴィヴィオが二人を放す

へりで幸太郎、なのは、フェイト、はやては聖王教会と呼ばれる場所に向かっていた

「で、なんで俺まで？」

「これから向かうところは幸太郎君にも関係あるからや」

「じゃあ、管理局と敵対関係だったアギトはともかくデディは駄目なの？」

「いや・・・だって・・・多分、つかまるで、門番に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ、普通ならそうである

到着

．．．．．すいません、遊び心です

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

「高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官です」

「降臨、今回は出番多し」

『．．．．．』

「「「何やってんの――――！――――」」」

降臨、満を持して！！（後書き）

シャマル「シャマルと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「なぜジークばかり・・・」

シャマル「ジークちゃんが存在が最近忘れられがちだからしら」

テディ「いつかきつと・・・私も・・・」

シャマル「それを言うなら私だって（ニコッ）」

テディ「リインさんと私とシャマルさんで組織でも作りますか？」

予言（前書き）

前回感想を書いてくださった

断空我さん

疫病神さん

輝さん

皆大好きさん

ありがとうございました！！

これからもよろしく願います！！

感想お待ちしております

予言

「改めて、聖王教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します」

「野上幸太郎」

カリムと幸太郎が自己紹介をする

ジーク？幸太郎が窓から捨てたよ

「どうぞ、座ってください」

カリムが幸太郎たちを座るように促す

「よいしょと」

「失礼します」

「クロノ提督、少しお久しぶりです」

幸太郎は超が付くほど気楽に、逆になのは達は超が付くほど堅苦しく座った

「ああ、フェイト執務官」

クロノと呼ばれた男性もなんか堅苦しい

「うふふつ、お二人ともそう堅くならず。私達は個人的にも友人だから、いつもどおりで平気よ」

カリムは笑顔で告げる

「と、騎士カリムが仰せだ」

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だった？」

「兄弟いたの！？」

幸太郎が驚いていたがフェイトは冷静に答えた

「義理の、だけどね」

しばらく談笑が続く

「さて、それじゃあここからが本題や。まず、イマジンとガジェットの関係・・・イマジンの専門家の幸太郎君に今回の件についての意見を言ってもらいます」

全員が幸太郎の方を見る

「まず、間違いなくイマジンはガジェットを作ったやつ・・・スカリエッティだっけ？そいつと手を組んでる」

「根拠は？」

普段はデンライナーメンバーと同じレベルのはやてでも今回は真面目だ

「アギトの話だと、敵のボスはネガタロスって言うイマジンなんだ。これはじいちゃんも調べたことだから確実だ。そいつはじいちゃん達が一度倒したんだ・・・でも、生きてた」

「良太郎に対する復讐って事？」

フェイトが幸太郎に問う

「うん。しかもそいつはじいちゃんから盗んだパスを持つてるから時間を自由に越えられる
それで、仲間をどんどん集めていくんだ」

「時間を自由に・・・スカリエッティが飛びつきそうやな」

「なるほど、確かにそうなると今までのことも考えると奴らは手を組んでいると考えられるな」

クロノは腕を組んで難しそうな顔をする

「どうしたのクロノ君？」

なのはがクロノの様子に疑問を覚える

クロノはなのはの疑問に答える

「六課設立の表向きの理由はロストログィア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官。リンディ・ハラウンだ。それに加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め、協力の約束もしている」

「「えっ！」」

「？」

なのは達は驚いているが、正直幸太郎はその人たちがどれほどえらいのかよく分からないので一人だけ取り残された気分だ

「その理由は私の能力と関係があります」

「私の能力『プロフェーティン・シュリフテン』これは最短で半年、最長で数年先の未来。それを詩文形式で書き出した予言書の作成を行うことができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんからページの作成は年に一度しかできません。しかも、的中率はよくあたる占い程度です」

「（デネブとかデディあたりが好きそうだな、そういうの）」

普通なら驚くところだろうが、常識が通じないことが常識のMr.^{ミスター}チャーハンことオーナーよりかはよっぽど常識的なので幸太郎はあまり驚かなかった

カリムが予言の内容を言う

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の元、聖地より彼の翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も焼け落ちる」

「まさか・・・」

「それって・・・」

「・・・」

なのは、フェイトは予言の意味が分かり、若干ふざけ気味だった幸太郎も黙って聞いた

「ロストログアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と。そして管理局システムの崩壊・・・でも、まだ続きがるんです」

「時守^{ときもり}の元に集いし魂。黒き野望を砕き、時守も散る・・・」

「時守って・・・まさか・・・!」

なのはがはやてを見る

「うん、こちらは多分、良太郎君が幸太郎君と思つとる．．．でも、良太郎君はすでにこの世界から離れてる、つまり．．．」

はやてはそこから先を言うことができなかった．．．．

なのはが幸太郎に好意を持っているのは簡単に分かる

『散る』と言つ言葉が指す意味も．．．

予言（後書き）

ザフィーラ「ザフィーラと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「何かシリアスになってしまいました、次回からはほのぼのギャグがしばらく続きます!!」

ザフィーラ「……」

テディ「どうかしましたか？ザフィーラさん？」

ザフィーラ「いや……（さりげなく初めての出番じゃないか？）」

「

ママとパパと紫の龍（前書き）

前回感想を書いてくださった

疫病神さん

ボンチューさん

断空我さん

いつもありがとうございます!!

これからもがんばるのでよろしくお願いします!!

感想お待ちしております

ママとパパと紫の龍

「ただいま」

カリムの予言を聞き、なんとなく思い雰囲気になっていた幸太郎たちだったが、いつまでも俯いていては皆に心配をかけるということでも明るく振舞っていた

そして、幸太郎となのは、フェイトはヴィヴィオとテディ、アギトのいる部屋へとやって来た

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま」

3人がそれぞれ挨拶をすると案の定、ヴィヴィオがとんでもない速さでやって来た

「よう、ヴィヴィ・・・がつ・・・!!」

幸太郎に飛びつこうとした瞬間、バランスを崩したヴィヴィオの頭が幸太郎のストライクゾーンに直撃。

結果、幸太郎は大切な何かを失う・・・

「幸太郎！おい、幸太郎!!」

「え？そこってそんなに痛いのか？」

大量の脂汗を垂らしながら、静かに、アソコを抑えてうずくまる幸太郎を見て、ディはマジで心配し、アギトは幸太郎がふざけているのかと思っていたので驚いていた

「・・・ああー！早速予言が当たっちゃったよ！どうしようフェイトちゃん？！」

なのはもかつて無いあわてぶりを見せているが

「（もうこれ放っておいていいかな？）」

この場で唯一、まともな思考ができる大人フェイトの活躍によりこの場は納められたのは別の話・・・

「ところで、ヴィヴィオ相談んだけどね？」

「うん」

なのははヴィヴィオに自分がしばらくママの代わりになるといってとをできるだけ簡単にヴィヴィオに説明した

「ママ？」

「そう。ママだよ」

「パパ？」

「え？いや、俺はちが・・・」

「そう。パパだよ／＼！！」

「おい！！」

なぜかなのはがママ、幸太郎がパパ、ヴィヴィオが娘と言うファミリーができてしまった

「・・・せめて、お兄ちゃんに頼む・・・」

幸太郎がそう言うのと再びヴィヴィオが泣きそうになったので結局パパになったという・・・

「わ～～い！パパ！」

SIDE

幸太郎

「しかし、どうするんだ幸太郎・・・これでは良太郎は『ひいじいちゃん』になってしまうぞ」

「テディが果てしなくどうでもいいことを心配していたが、無視！！」

「兄貴、兄貴！！だったらアタシは兄貴の側近な！」

アギトはアギトでトン違いな事を言っていたが、これも無視！！

問題なのは・・・

「うふふ、アハ 幸太郎君がパパで、私がママ・・・うふふふ」

なんなんだ！？コイツは！？

「くそつ、フェイトは呆れてどっかに行ったし・・・どうすればいいんだ・・・！」

「幸太郎・・・あきらめたら、そこが終点だ・・・」

殺すぞ

俺が本気で悩んでいると、不意に紫の影が一瞬見えた

そこで俺の意識は途切れた・・・

幸太郎

SIDE OUT

「幸太郎・・・くん・・・？」

やっと理性を取り戻したなのは幸太郎が急に倒れたかと思うと一瞬で起き上がったことを不審に思っている・・・

「わゝ、やっぱりコッチの方が動きやすいや!」

と、どこからか出した帽子をかぶりながら幸太郎?が言った

そして、テディのほうを見て・・・

「あー!青い熊ちゃんだ!久しぶりー」

と言い出した

ママとパパと紫の龍（後書き）

良太郎「良太郎と」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「なぜ彼を？」

良太郎「あゝ、ちょっと伝えて欲しいことがあったんだけど・・・」

「

テディ「完全に忘れてますね、アレ」

良太郎「思い出してもらえたらいいんだけど・・・」

答えは聞いてない！！（前書き）

申し訳ございません！！

感想を書いてくださった方に返信をしようとして間違えて感想を消してしまいました！

感想を書いてくださった方がコレを見てくださいれば光栄です

ゴーストイマジンは出る予定です！！

それと、前回感想を書いてくださった

疫病神さん

断空我さん

皆大好き

キラさん

私のせいで感想を消してしまった方

ありがとうございます！！

これからもよろしく願います！！

感想お待ちしています

答えは聞いてない！！

「それで、なぜここに？・・・リュウタロス」

リュウタロス
テディがR幸太郎に問う

なのは達も状況を理解するために黙っている

「え〜っと、たしか良太郎に何か頼まれてたんだけど・・・ま、いいや」

『いいのかよ！！』

思わずツツコミを入れたことは誰にも責められないだろう

「そんなことより君、僕と遊ばない？」

「うえっ？」

リュウタロス
R幸太郎に指差されたヴィヴィオがたじろぐ

「え・・・あ・・・で、でも・・・」

「答えは聞いてないっ！！」

「わ〜〜！」

リュウタロス
R幸太郎はヴィヴィオを担いで逃げていった・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

なのはが通信機を取り出す

「もしもし、はやてちゃん？・・・私達の温かい家庭（予定）を壊すイマジンが出たの・・・うん。だから射殺許可いいかな？」

「何、物騒なことを言ってるんですか！？」

テディの渾身のツツコミを無視してなのはは走り去っていった

ちなみにアギト（とはやて）は恐怖のあまりしばらく動けなかったという

一方その頃・・・

「ねえねえ、何して遊ぶ？答えは聞かないけど。」

「ふええええ！？」

なのはによるR幸太郎捕獲作戦が出されていることも露知らず、
幸太郎はヴィヴィオを連れて逃げていた

リュウタロス

リュウタロス

しかし、曲がり道を曲がったところでスバルが待ち構えていた

「あゝゝ！！ティア！いたよ、ヴィヴィオと幸太郎さんだ！」

そして、ワンテンポ遅れてティアナもやってくる

「動かないで！あなたが何もしなければ私たちも危害を加えないから」

ティアナがR幸太郎に言うが

リュウタロス

「ねえ、お姉ちゃんたちも一緒に遊ぼうよ！」

と言う一言に

「「は？」」

となるしかなかった・・・

「……なのはちゃん、どういうことかな？」

「ううー、ごめんなさい……」

はやての笑顔だけど威圧たっぷりの表情を前になのはは謝ることしかできなかった

まあ、リュウタロス捕獲のためになのはは起動六課にかつて無いほどの恐怖を与えたのに、結果が

『実は味方でした』

では済まないだろう

結局、リュウタロスはヴィヴィオ、フォワードの面々と遊ぶことで満足し、幸太郎から出て行った

「まあ、それはともかく、じいちゃんからの用事で来たんだろ？」

幸太郎に一言により、寝転がって絵を描いていたリュウタロスが立ち上がって話を始める

「うん。良太郎がコレを幸太郎に渡してって」

リュウタロスはクシャクシャになった茶袋を幸太郎に渡す

その中に入っていたのは

「・・・・・・・・お年玉だ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・それだけ？」

全員が哑然とする中、出番の少ないエリオが代表して聞く

「そう・・・・みたい・・・・だな・・・・でも、なんでわざわざリュウタロスに？」

幸太郎がリュウタロスに問う

「えー、だって亀ちゃんはナンパするし、熊ちゃんは冬眠中だし」

ちなみに、モモタロスの事を言い忘れたのはわざとだ

「じゃ、僕かえるからね、バイバイ」

「あつ、ちよい!!」

はやてはまだリュウタロスに聞きたいことがあったので引きとめようとしたがすでにどこかへと行っていた・・・・

「（何で良太郎君が直接来んかったんや？」

はやての疑問は残ったままだった・・・

ちなみに

「お年玉？」

「はい！良太郎ちゃんは幸太郎ちゃんのおじいちゃんなんですから、ちゃんとあげないとダメですよ」

「でも、僕は今、アツチに行けないし・・・」

「だったら僕が行くゝ！！」

「えっ！ちょっと、リュウタロス！！」

「待ちなさい、リュウタ！！」

「行つてきまゝす！」

なんてことがあったのは幸太郎は知らない

答えは聞いてない！！（後書き）

リュウタロス「リュウタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

リュウタロス「青い熊ちゃん、鳥さんどこ？」

テディ「（そういえば、幸太郎が捨てたって言ってたような・・・）」

「

リュウタロス「ねえ、ねえってば！」

テディ「ジークは星になった」

リュウタロス「ほんと！？鳥さんすごい！」

テディ「次回は番外編です」

番外編 幸太郎の一日

SIDE

幸太郎

俺の一日は朝起きて、テディとアギトに挨拶することから始まる

「・・・おはよう、テディ、アギト」

「おはよう、幸太郎。よく眠れたか？」

「あ~~~~・・・ZZZ」

テディは起きてて当然だな、アギトの二度寝もいつものことだ

「パパ~~~~!!」

「よう、元気そうだな」

朝から忙しいのはと違って、俺は基本任務がない時は暇だからヴィイオの相手が最近の日課だな

「テメエ・・・兄貴になれなれしいんだよ・・・ああん？」

「アギトさん!どうどう・・・」

アギトはいつつもヴィヴィオを脅す。何でだ？

デイはアギトと兄妹的な関係だから、それを落ち着かせるのが仕事だな

「幸太郎くーーーーん!!」

^{なのは}奴が飛んできた!? 回避!

・・・失敗

「どうしたの、幸太郎君？」

「だから危ないから滑空しながらこっち来るなって!!」

「幸太郎君なら大丈夫だよ! ヴィヴィオ! パパとママがそろったよ」

「わ~~~~! ママーー!!」

・・・ああ。初めて会った時はもっとまともな子だと思ってたのに・

何かなのはを変えたんだ？

「幸太郎！見つけたぞ！今日はヒートフォームで戦ってもらっぞ！」

今度はシグナムか・・・

ま、アレはただのバトルマニアってところかな

「おっしやー！やってやろうぜ兄貴！！」

お前もどっから来た・・・？

俺はNEWデンオウベルトを腰に巻いて赤いボタンを押す（黄色はウイングフォーム、青色はストライクフォームに戻る）

『Heat Form』

「やっと解放された・・・」

俺は別に戦うのが好きでもないのに・・・ま、強いけどね。俺
今日も勝ったし

「・・・おつかれさま、幸太郎。風呂が沸いてるぞ・・・」

デディはこうゆう所で気が利いている。やっぱりお前は最高のパートナーだ

「ありがとな。じゃ、俺は風呂に行ってくるから」

「・・・いや！やっぱり私にはできない！！やめるんだ、幸太郎！
」

「は？何でだよ？お前・・・変だぞ」

俺は若干逃げるように風呂に行った

俺が風呂に行くと・・・

「よう、兄貴。遅かったな」

アギト・・・まあ、コイツはいいや

「パパ〜」

ヴィヴィオ・・・許容範囲だ・・・

「幸太郎君？」

誰かは言うまでもないよな・・・！

「デディーー！！！！うおおおおおおおおおおい！
」

パンツー丁で逃げてきた俺はデディの元に行き・・・

映画の約五倍の形相と声でデディの胸倉を掴む

「幸太郎、だから忠告したんだ・・・いや、したんです。脅されて
いたんです。申し訳ございませんでした・・・！」

かつて無い俺の形相にひるんだデディがいつも以上に丁寧な敬語を
使う

パンツはまだ脱いででなかったし、見えてないだろうな？（こっちは
向こうを見てないぞ！！）

なんとか無事に入浴、食事を終えたらなのはも流石に何もしてこない
平和のために戦うヒーロー物とかバカにしてたけど・・・平和って
いいな

幸太郎

SIDE OUT

SIDE
フェイト

「それじゃあ、幸太郎まだ気づいてないの？」

私はルームメイトのなのは相談に乗っています

「うん……。幸太郎君って鈍感なのかな？」

なのはの素行にもかゝり問題あると思うけど……

「何か言った？」

「ううん、何も言ってないよ……」

「ううん、どうすれば気づいてもらえるのかな？」

「告白は？」

私は提案してみますが・・

「ふええ！それは恥ずかしいよ・・・」

あんなに行動力あるのに！？

どうやら、幸太郎がなのはの気持ちに気づくにはもう少し時間がかかりそうです

フェイト

SIDE OUT

暗躍する影（前書き）

前回と番外編と短編で感想を書いてくださった

ブラッキンさん

門矢光さん

ボンチューさん

紅さん

ラハールさん

三龍さん

疫病神さん

断空我さん

たぬえもんさん

キラさん

まことに多くの感想ありがとうございました！！

これからもよろしく願います！！

感想お待ちしております

暗躍する影

リュウタロスの来訪から数日たったある日……

アイツは何がしたかったんだろう？

まあ、それはさておき

現在、幸太郎はヴィヴィオと散歩中だった……。理由は番外編を見てもらえば分かります

「……つまり、この前の紫の奴は俺のじいちゃんの仲間だ」

幸太郎はヴィヴィオにリュウタロスのことを説明していた。普通は気になるものだろう

「……おじいちゃん？」

だが、ヴィヴィオの興味はリュウタロスではなく『じいちゃん』だった……

「ああ、俺のじいちゃんです野上良太郎』って言う人だ。ヴィヴィオにとっては一応ひいじいちゃんか？」

「その兄貴のじーちゃんって一度来たらしいけど、アタシは寝てたから会ってないんだよね」

アギトも良太郎には興味があるようだ

「とても優しくて、それでいてともしつかりした方ですよ」

テディは良太郎を若干美化している気もするが、あながち間違いでもないだろう

「後は、おばさ・・・愛理さんと侑斗さんくらいかな？」

言い直したのは、彼が幼い頃に飲まされた『特別ジュース』という名の化学兵器が関係しているかどうかは不明だ・・・

「（そういえば、ハナさんもじいちゃんも愛理さんも俺も特異点なんだよな・・・野上家って特異点生まれやすいのかな？）」

幸太郎がそんなことを考えていると・・・

「幸太郎くーん、ヴィヴィオーー!!」

なのはがやって来た

「あ・・・」

ヴィヴィオはほとんどずっと一緒にいる幸太郎には気兼ねなく話せるようだが、なのはにはなついていないが若干緊張するようだ

「朝ごはんこれからだよな？一緒に食べよう!」

なのはがヴィヴィオを抱っこしながら言う

朝食後、なのは、スバルはデスクワーク。フェイト、エリオ、キャロ、ギンガは任務、はやて、ティアナもクラウディアに出かけた・・

「それで、俺の仕事はヴィヴィオのお世話か・・・俺が機動六課に入る必要あったと思う？」

幸太郎はヤケクソ気味にティディに問う

「しかし、幸太郎はこの文字が読めないからデスクワークは出来ないし・・・私達の存在は極秘だから下手に任務へ出すわけにも行かないし・・仕方ないだろう」

ティディは幸太郎を落ち着かせようとするが、幸太郎はブラックなオラを出したままだ・・・

「よし、せっかくだし・・・『アレ』試すか？」

「! ! . . . 『アレ』は幸太郎の負担が大きいからやめた方がいい . . . 」

「? . . . 何だよ『アレ』って?」

「? ? ?」

アギトが問う、ヴィヴィオも頭に?マークが浮かんでいる

「俺達の本当のカウントダウン . . . でいいのか?」

「? ? ? ?」

やっぱりよく分かっていないようだが、コレについては後日、説明することになり、結局幸太郎は丸一日、ヴィヴィオとアギトの遊び相手をする事になった . . .

「・・・おい、犬と猿あと、鳥！」

暗い謎の場所で黒いイマジン・・・ネガタロスが3体の部下を呼ぶ
それに反応して犬のようなシルエットのイマジンと猿・・・という
かほとんどゴリラのようなイマジンがやってくる

「お呼びですか、ボス？」

「ボクウになんか用？ガガガガ！」

犬のようなイマジン『ドッグイマジン』とゴリラみたいだけど一応
猿のイマジン『モンキーイマジン』がそれぞれ用件を尋ねる

「おい、鳥はどこだ？あと、お前、それキモイからやめろって言う
たろうが!!！」

もう一匹の部下の所在を聞きながら、ネガタロスはモンキーイマジ
ンの奇妙な笑い方にツツコム

「奴なら、ボスから器をもらってからずっと奇妙な笑い声を上げて
飛んでいます。」

「アイツは・・・!!！」

ネガタロスは呆れたような、怒ったような声を上げる

「器なんか上げたのが間違いだよ！どうせならボクウが使ったのにガガガガ！！」

「あの器、何といましたっけ？」

「ゼストだ！ゼ・ス・ト！！なかなか使えそうな器だったのに・・・！！」

暗躍する影（後書き）

シャーリー「シャーリーと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「段々、出番少ない人のための場所になってきましたね。ここ」

シャーリー「でも、ヴァイス陸曹なんて作者の都合で存在を抹消されたくらいですよ？」

テディ「恐ろしい……」

番外編 ヒーローショー

「・・・さて、今回幸太郎君を呼んだのは他でもない…任務や!!」

「本当、はやて!？」

幸太郎は待ちわびていた任務に思わず身を乗り出していた

最近はヴィヴィオと遊ぶか、シグナムと運動するかぐらいしかしてなかったので、当然だろう

「それで、任務の内容とは？」

ハイテンションな幸太郎に代わってデディがはやてに問う

「ヒーローショー!!」

「「……………は?」」

「ヒーローショー!!」

「ヒーロー…兄貴にぴったりの任務じゃねえか!」

アギトは知らないであろう…中の人への恥辱を

「…………いろいろといたいことはあるけど、それ、六課の任務じゃないよな?」

幸太郎の問いにはやては悪びれも無く

「いやー、知り合いがやるはずやったんやけど、全員腹壊してもてな。ほら、いま流行のノロウイルス。それで、勢いでつつい・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやての話を聞いて、無言でNEWデنوウベルトを巻く幸太郎

「テディ、カウントは3だ」

3秒後

「はい、すいません。調子に乗りすぎました。もう絶対にこんな勝手なことは致しません。…フォワードの皆様も協力してくれるとの事で…詳しいことはそちらにお任せします・・・・・・」

すっかり卑屈になった。部隊長Hを置いて幸太郎はフォワード陣のもとに向かった

「あ、幸太郎さん！！こっちでーす！！」

食堂にて、大量の料理を食べながら打ち合わせをしているメンバーがいた

エリオとキャラはなんかあの歳で『あきらめ』を覚えている。ティアナは頭を抱えて嘆いていた

「クソ狸の話だと、詳しい設定とかはこっちはやて決めるらしいな？」

キャラが答える

「はい。五人組の戦隊物みたいなんですけど…隊の名前すら決まっていなみたいで…」

「戦隊・・・ライダーがやっちゃ駄目でしょ。それ」

幸太郎は何かの電波をキャッチしたようだ

「はい、はい！！だったら、食物戦隊 タベルンジャーなんてどう？」

「どや顔で言われても反応に困るわ。」

「じゃあ、環境戦隊 マモルンジャーなんてどうですか？」

「スバルよりマシ。ただそれだけ。」

ティアナの判定は厳しかった・・・

結局、一時間の会議で

『時間戦隊 デンレンジャー』

という奇跡と呼ぶにふさわしい名前になった。

「次は隊員の色ですね。これも設定は全くありません」

エリオが苦々しい表情で言う

「ここは無難に髪の色でいいんじゃない？」

ティアナの意見が通り、各自の名前が決まった

幸太郎＝デンレンジャーブラック

エリオ＝デンレンジャーレッド

キヤロ＝デンレンジャーピンク

スバル＝デンレンジャーロイヤルパープルバイオ

レット

ティア＝デンレンジャーオレンジ

「よし、決定。」

「いやいやいやいやいやいや！！！！！！なんなんですか私の名前！！！！？」

「へ、だってスバルの髪の毛の色ってややこしいじゃん」

「パープルじゃ駄目なんですか！？？」

さっきまであんなにはしゃいでいたスバルが本^{マジ}気の反論をしていた

「似合ってますよ、ロイヤルパープルバイオレット？」

エリオの言葉に悪気は無かった。だからタチが悪かった……

「次はストーリーだよね」

キャラの行動も悪気は無かった。それゆえにスバルはorzになった……

「テディがエキストラAを襲って、それを倒す。でいいんじゃない？」

ティアナの意見はまたしても簡単に通った。

そして、本番……

はやて、フェイト、なのは、アギト（幸太郎以上に極秘のため参加できず）、ヴィヴィオ、その他の隊長陣は部下達の活躍を見に来ていた

テディ「ふはははは！悪い子はいねが〜〜！！」

エキストラ「きゃあああー！！」

やっていることはアホみたいなのに、テディの姿と演技力は子供を
びびらせるには十分だった

幸太郎「そこまでだ。怪人テ・ゾー！！」

テディ「なんだ貴様らは！？」

黒い衣装に身を包んだ幸太郎と他のメンバーが現れる

幸太郎「この黒さは運の悪さを表している デンレンジャーブラ
ック！！」

……そこには、『耐える男』という芸術があつたという……

ティア「レッドとの微妙な違い デンレンジャーオレンジ！！」

キャロ「この色は真のヒロインの証 デンレンジャーピンク！！」

スバル「（ええっと…私ってなんて名乗るんだっけ…ええっと…
）」

スバルが名乗る出番が来る

スバル「えっ、あつ…燃え上がるやる気 デンレンジャーレッド

「!!」

全員「・・・!?!」

ティア「(バカスバル!!何やってんのよ!?)」

キャロ「(ああっ!レッドの座を追われたエリオ君が混乱しています!)」

幸太郎「(しかも、燃え上がるやる気って何だよ!新人の漫画家か!?!)」

スバル「(・・・ごめん、エリオ)」

一方、社会的地位を奪われたエリオは何と名乗るかを人間の限界を超えた速さで考えていた

エリオ「(えっと、色、色、色!なにか僕の・・・あ、そうだ、もう裏切って怪人になろうかな?)」

その時・・・

テディ「隙ありー!!」

これ以上ないほど全力で油断してたエリオにテディが攻撃をする

だが、この時のテディはエリオには救いの神に見えたという

全員「(ナイス、テディ!)」

キャラ「ああっ！仲間がやられたー！」

幸太郎「許さないぞ、テ・ツイー！」

デディ「かかってくるがいい！愚かな人間が！」

結局、エリオは名乗っている最中に倒されるというレジェンドを残した伝説の隊員という役に変更され、エリオ抜きでシヨールは進んだという……

「僕、何か悪いことしましたか？」by 幸太郎の不幸が伝染した少年

模擬戦戦争（前書き）

前回と番外編で感想を書いてくださった

疫病神さん

ブラッキンさん

断空我さん

霞 空斗さん

ありがとうございました！

これからもよろしく願いします！！

感想お待ちしております

模擬戦戦争

「今日は皆にお知らせがあります。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく六課に出向となります」

なのはがフォワードのメンバーに仕事口調で告げると、スバルと同じ髪の色をした女性が挨拶をする

「108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします。」

「……はい!」「……」

挨拶が終わったところで、ギンガが

「ところで、なのはさん、幸太郎君はどうしてますか?」

となのはに問う

「幸太郎君は今は私の娘のパパとしてがんばってるよ」

本当にコイツは…。

事情を知っている者意外でこんなことを言われたら誤解するのは当然だろう…

ギンガも苦笑いをするしかなかった

「そうだ、せっかくだし、今日の訓練には幸太郎にも参加してもら

「つたらどうだ？」

シグナムが提案するが、実は自分が戦いたいだけだ

「確かに…今思えば幸太郎さんと模擬戦した事ってありませんよね？」

と、言うわけで

幸太郎 参戦決定

「話は分かったけど…なんでよりによってなのはに迎えに来させるんだよ！？」

幸太郎がキレ気味に言う

「お、落ち着け幸太郎！」

「うるさい。アンタにいきなり寝込みを襲われそうになった俺の気持ちが分かんのか？」

「あんまりイライラするとハゲるぞ。」

シグナムの男に対しては最強の脅しに一度黙る幸太郎

幸太郎の突然の参戦により

隊長4人組VSフォワード五人+NEW電王で模擬戦をすることになったのだが

「せっかく幸太郎君も入ってくれるんだし、罰ゲームをつけない？
幸太郎君を倒した人は一日幸太郎君を自由に出来るとか？」

というなのは悪魔の提案（幸太郎限定）が入ってしまった為、絶対に負けるわけにはいなくなっていた

「絶対に勝つぞ！命をすり減らしてでも勝つんだ！！」

「じゃあ犯ってみようか！」

幸太郎の心からの叫びと、なのはの何かアブナイ発言で戦いの火蓋は切って落とされた

幸太郎がNEWデンオウベルトを巻くと周りにミュージックホーンが流れる

「変身!!」

『Strike Form』

『セットアップ!!』

Set Up

「ううおおおおおおお!!!!!!!!!!」

文字通り、全力全開で一番の危険分子であるのはに切りかかる幸太郎

普段の彼はクールです

ちなみに、フェイトはエリオとキャロ、ヴィータはスバルとギンガ、シグナムはティアナと交戦中だ

「何があってもお前だけは倒すぞ!」

「幸太郎君が相手でも今回だけは譲れないよっ!」

お互い、すでに人間の限界などつくに超えているのだが、そんなことは露知らず戦う二人

2時間後

フォワードは一人も隊長を倒すことなく全滅していた

近くにたまたまいたジークを無理やり協力させ、ウイングフォーム（体の主導権は幸太郎が奪い取った）でなんとかヴィータの撃墜に成功

騒ぎを聞きつけたアギトの協力により、ヒートフォームでシグナムも撃破

隊長二人を倒すという偉業を成し遂げたが、やはり限界が近づいてきていた

「幸太郎君、どこー？」

ストライクフォームに戻ったNEW電王は愛剣 マチエーテディで草陰からなのはを打ち落とそうとしていた

もうヒーローの戦い方ではありませんね

「テディ、いけそうか？」

「距離が少し足りないな…撃った直後に仕掛けた方がいい」

「分かった」

そして、NEW電王はなのはを撃つ……が

「なのはぐこっちにもいな…うわぁぁ!!」

よりによってソニックムーブでやって来たフェイトに直撃。

「……………あ。」

そして……………

「勝者 高町なのは!!」

幸太郎が絶望にゴールインした……………

模擬戦戦争（後書き）

作者「作者と」

テディ「テディの」

2人「特別コーナー」

テディ「なぜあなたが？」

作者「もう出す人がほとんどいないことと、読者の皆様に伝えたいことがあるからだよ。テ・ツイー君」

テディ「伝えたいこと？」

作者「そう…この前勢いで書いた影山が以外に好評でね…連載しようかなあと」

テディ「オーズの予定を立てておきながらですか！？」

作者「大丈夫。オーズの連載をする頃にはこの連載は多分終わってるから」

テディ「うそお！！」

作者「そこで、影山が主人公の小説のタイトルを読者の皆様にも考えてもらおうと思つて」

作者「その名も…新連載タイトル募集！！」

テディ「まんまですね」

作者「うるさいよ。とにかく多くのタイトル応募待ってます！！」

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 前編（前書き）

前回感想を書いてくださった

断空我さん

霞 空斗さん

疫病神さん

ブラッキンさん

門矢光さん

仮面ライダーディケイド神さん

ありがとうございました！

感想お待ちしております

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 前編

「お出かけ？」

「うん。お出かけなの」

なのはとの模擬戦に敗北した幸太郎は、一体どんなことをされるのかを心配し、一秒が何十年にすら感じていた。そして、なのはからの命令が遂に来た

「ヴィヴィオも連れて三人でどこかでお出かけしようよ」

「…え？」

予想外

読者の皆様も拍子抜けしただろう

「俺に拒否権は無いからいいけど…なんでお出かけ？」

「ヴィヴィオが来てからお休みもあんまりないし。ヴィヴィオを連れてどこかにお出かけしたいな」って思ってたの。そうだ…この前新しく出来たデパートなんてどうかな？」

「う…うん…」

『命拾い』

今、幸太郎にもっともに会つ言葉だろう

「パパ、ママ」！

またちょうどいいタイミングでやってくるヴィヴィオ

しかし

「うや」

「あ、こけた」

二人を見つけたのがよほどうれしかったのか、思いっきり転ぶヴィヴィオ

そして、傍観ぼうかんきめ込んで助ける気の無い親代わり二人

しかも、二人以外は全員、医務室に旅に出ていた

「ヴィヴィオ、大丈夫？怪我してないよね？がんばって自分で立てみようか」

なのはが優しい口調で数メートル先のヴィヴィオに言う

「パパ…ママ…」

ヴィヴィオは泣く寸前だったが必死に涙をこらえていた

「俺達はどこにいるぞ。ちゃんと自分の足で立つんだ」

幸太郎も決して意地悪で助けないのではなく、なんでもかんでも甘やかすのが良くない事はTVのドキュメンタリーとかでなんとなく分かっていたので助けなかったのだ

しかし

「大丈夫ですかー!?」

ちよつと離れた所からやって来たテディがヴィヴィオを起こしてしまふ

「痛むところはありませんか？息苦しかったり、寒気がしたりは？」

「…空気読めよ」

テディ、今回の出番終了

「でも、買い物って言うても今何か必要なものとかあるの？」

朝食の時間はとくに過ぎてしまったため、昼食を食べながら問う
幸太郎

「うん。必要なものは無いよ……でも、新しく出来たデパートだから人は多いし、もしかしたら本物の家族だと思われたりして」

本音ポロリ

幸太郎は18歳未満なのでアレは出来ないので、周りから『子持ち新婚カップル』と認識させる事こそが真の狙いだったりする

「じゃあ、早速行こうか」

「オツケー」

「うん！」

ヴィヴィオは始めて二人と出かけるのがうれしいようだ

???

「おい、犬」

「何でございましょう、ボス？」

謎の場所でネガタロスが部下のイマジン、『ドッグイマジン』を呼びつけていた

ドッグイマジンは静かに腕を組んでいる

「電王…いや、新しい電王だからNEW電王とでも言うか…まあ、何でもいいか。…がこの地図の場所にいる。前座のクセして目障りになってきたからな…そろそろ消しとけ」

ネガタロスがドッグイマジンに地図を投げる

「かまいませんが…ここだと他の人間も適当に殺すかもしれません、が、よろしいですか？」

ドッグイマジンは極めて冷静に言う

人が殺すことなど彼にとっては蚊を殺すこととなんら変わらないのだ

「今更いちいち当然の事を聞くんじゃないやねえよ…いいからさっさと行け」

「了解」

一方、デパートではヴィヴィオの服、なのはのウィンドウショッピングなどで幸太郎たちは時間を過ごしていた

すぐ近くにある殺気に気づくことなく…

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 前編（後書き）

ネガタロス「ネガタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「ところで、あなたはどうして生きているんですか？」

ネガタロス「いきなり核心を突くんじゃねえ！まあ…キバと電王、ゼロノスの攻撃を食らって、ネガデンライナーが消滅した時に飛び降りて今まで時間の中をさまよってたんだがな」

テディ「それで次に現実世界に来たら別の時空だったと…？」

ネガタロス「そういうことになるな」

テディ「一応設定はあったんですね…」

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 後編（前書き）

前回感想を書いてくださった

疫病神さん

霞 空斗さん

仮面ライダーディケイドさん

断空我さん

ブラッキンさん

ありがとうございました！！

これからもよろしくお願いします！！

感想お待ちしております！

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 後編

「なのは、次はどこに行くの？」

大体のところを回ったので、幸太郎が疲れ気味に言う

「そうだね…うん」

なのはもあまり思いつかないので、ヴィヴィオに意見を求めようとした

その時…

「電王ですね？」

「…!!」

不意に掛けられた声に表情を変える二人

「お前は…!？」

「申し遅れました。ワタクシ、ネガタロス軍団（仮）の幹部をやらせていただいています。『シャス』と申す者です」

かぶっていたフードを脱ぎ、狼とアヌビスが混ざったような黒い姿を見せるドッグイマジン…シャス

「ひっ…!」

ヴィヴィオがその姿を見て怯える

「シャス…？なんで、俺がここにしていることが…？」

幸太郎がここにいることはせいぜい機動六課の面々しか知らないはずなのに

シャスが幸太郎の居場所を知っている事に疑問を覚える幸太郎

「そんなことは簡単ですよ。もつとも、教えるわけにはいきませんがね」

「それで？わざわざご挨拶に来たってワケじゃないんだろ？」

幸太郎は挑発とも取れる小バカにした口調でシャスに問いながら、ベルトを構える

「話が早くて助かります。貴方のような前座にうるちよろされては迷惑ということで、ワタクシが貴方の抹殺を命じられました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

幸太郎は呆然としていた。

ネガタロスが自分を狙ってくることは予想できていたが、自分を殺しに来たというこの相手からはまったく殺意のようなものを感じないのだ

「幸太郎君……」

なのはは心配そうに幸太郎を見つめる

「ああ、そうそう、一般人をを避難させるなら早くした方がいいですよ。このデパートの各所に爆弾を仕掛けて置きましたから。あと……ちょうど10分で爆発ですね。」

まるで、電車が来ることを告げる車掌のような冷静な口調でシヤス
が言う

「な　　！？」

「もつとも……信じるかどうかは貴方達の自由ですが」

「（コイツ……！ハッターで言ってるんじゃない……？）なのは！早く
皆を避難させて！」

幸太郎はNEWデンオウベルトにパスをセタッチする

「変身！」

『Strike Form』

「幸太郎君は！？」

「俺はコイツを倒してから行く……！俺の強さは知ってるでしょ？」

「……分かったよ……必ず後から来てね！信じてるから」

本当なら、ここで幸太郎と共に戦いたかったが、そういうワケには
いけない……

なのははヴィヴィオを連れて、六課に連絡しながら店員に事情を伝

える

シヤスにデンガツシャーの刀身を向けるNEW電王

「ふむ。確かに少しはできるようですが、所詮は子供のお遊戯ですね」

「あー、もう喋らなくていいよ。どうせ雑魚でしょ、お前？」

NEW電王はあくまで余裕の態度を崩さずにシヤスに挑む

わざわざ爆弾のことをコチラに話したのは自分を混乱させる為だと思っただけだからだ

「貴方のツレの女のせいで、一般人はこのフロアからほとんどいなくなりました。思いつきりかかって来くるというですよ」

「言われなくてもっ！」

シャスの懷に飛び込み、下から切り上げようとするNEW電王

しかし…

「遅いですね」

「なっ…!!」

NEW電王が剣を振りきった頃にはすでに、NEW電王の視界からシャスは消えていた

NEW電王の後ろに回りこんだシャスがNEW電王を後ろから何かで切りつける

「がっ…!!」

苦悶の声を漏らすNEW電王。

「実戦でコレを使うのは久しぶりですね。私の愛鎌『アビスラッシュ』です」

そう言いながら、手に持っていた犬を連想させる鎌を見せるシャス

「クソッ！」

だが、NEW電王はそんなことは気に留めず、シャスにもう一度切りかかる

「だから遅すぎるんですよ」

再び、まるで瞬間移動でも使ったかのような速さでNEW電王の後ろに回りこむシャス

「ふん!!」

シャスに後ろから思い切り突き飛ばされ、婦人服売り場に突っ込むNEW電王

「（コイツ…はや）」

「考え事をしているヒマがあるんですか？」

「なっ!!」

アビスラッシャーで何度も何度も切りつけられるNEW電王

変身も解け、意識も朦朧としていた

「予想以上にあっけなかったですね」

生身の幸太郎の首にシャスがアビスラッシャーを向けた

その時…

『悪いけど、それ以上はさせないよ…!!』

「「！！」」

そこに立っていたのは…

4体のイマジンのオーラを一挙にフリーエネルギーに変換した電王体の各部に備えられた4つのデンカメン

胸のターンブレストと全身のデンレール

電王クライマックスフォームだった

「じいちゃん…」

「ほう…貴方が電王ですか…ちょうどいい、まとめて始末してあげますよっ！！」

シヤスがクライマックス電王の懷に高速移動して、アビスラッシャーで左肩をきりつける『が』

「痛いがなっ！」

「…へ？」

聞こえてきたのはなんともマヌケな声で、しかもクライマックス電王はダメージを受けた様子はない

「オラァ！！！」

そのままの体制で、クライマックス C電王がシャスの顔面を思いつき殴る

もろに不意打ちだったのもあって数メートル吹っ飛ぶシャス

「ヘッ、ザマーミロ！…それよりずいぶんやられたみてえじゃねえか？オラ、立てるか？」

わざわざシャスに悪態をついてから、幸太郎に手を差し伸べるクライマックス C電王…

「モモタロス…何でここに…！？」

幸太郎はクライマックス C電王の手を借りて立ち上がりながら驚愕交じりの声で言う

『オーナーが幸太郎が狙われてるから助けてあげてって言ってたんだ。間に合ってよかった…』

クライマックス C電王の中から良太郎の声が聞こえる

「オーナーって本当に何者なんだよ…？」

『……………』

その問いに答えられるものはいなかった…

「それよりも、アイツ逃げちゃったけどいいの？逃がした魚がもう一度釣れるとは限らないよ」

クライマックス C電王の右肩のイメージ…ウラタロスが呆れたように言う

「そうだ……！！アイツはここに爆弾を仕掛けていったはずなんだ！早くここから出ないと！」

「なんやて！？卑怯な奴やな〜！」

今度はクライマックス電王の左肩のイマジン…キンタロスが怒声交じりに言う

彼は正々堂々とたたくことが主義なので、こういった無関係な人間を巻き込むのが気に食わないのだ

クライマックス
C電王に担がれて逃げる時に幸太郎は思った…

あれだけ大口たたいたという、簡単に負けた…

今回はじいちゃんが助けてくれたけど…

あとほんの少しオーナーが気づくのが遅かったら俺は死んでた…

なのはに後で行くなんて約束しておきながら…

結局、俺はあの時からなんも成長してないじゃんか…

じいちゃんの手伝いくらいしか今の俺には出来ない…

だったら…

『アレ』を使ってボロ雑巾みたいになった方がまだマシだ……！！

クライマックスの襲来とカウントダウンの覚悟 後編（後書き）

オーナー「オーナーと」

テディ「で、テディの…」

2人「次回予告コーナー」

オーナー「なにやら大変なことになったようですねえ、アレクサンドロビッチ君？」

テディ「は、はい…（この人、本編に出てないのに何でいるんだ！？…あ、私もか。」

オーナー「今回は番外編ですが、決してお見逃しのないように」

番外編 幸太郎捕獲大作戦 前編（前書き）

龍騎の映画を見て、マジ泣きして

555の映画を見て、嗚咽がとまらなくなって…

カブトの映画を見て、鼻水が止まらなくなって…

水分が足りない、今日この頃…

番外編 幸太郎捕獲大作戦 前編

なのはは現在、六課のいつものメンバーと食事をしていた

そして、不意になのはが口を開く

「ねえ…今日は朝から幸太郎君を見かけないんだけど、皆何か知らないかな？」

ビクッ！

スバル、フェイト、ヴィータがなのはの言葉に震える

「いやっ！知らないですよ！本当に！幸太郎さんどこだろうっな？」

（言えない…絶対に言えない…）

スバルがわざとらしく周りをキョロキョロと見回す

「た、多分、トイレじゃないかな？」

（言ったら…幸太郎は確実に殺られる…）

フェイトまでもが白々しく周りを見渡す

「そ、それよりも、早く食おーぜ！メシが冷めちゃう！」

（幸太郎…逃げろ…！）

ヴィータも脂汗を流しながら対応する

「そっか…じゃあ、後で探そうかな？」

『（マズイツ…！早くアイツを何とかしないと…！！）』

3人がキレイに同じ事を考えた…

そう

『（幸太郎が朝から六課の女を手当たりしだいナンパしてるなんて…バレたら幸太郎が殺される…！！）』

今朝のこと

「あつ、おはよう幸太郎」

「幸太郎さんおはようございまーす」

「よう、幸太郎」

部隊舎の中で偶然出会ったスバル、フェイト、ヴィータは通りかかった幸太郎に挨拶をした

しかし…

「……………ああつ！すいません…あなた達があまりにも美しくて、つい見とれていました…」

「…え？」

いきなり幸太郎が自分達を口説いてきたのだ

「よろしければ、僕と釣りに行きませんか？…愛という魚を捕まえるための釣りを…」

「おい、頭でも打ったのかよ…キモチワリイぞ…」

幸太郎から2、3歩引くヴィータ…

「幸太郎…なのはというものがありながら…」

フェイトが幸太郎に非難の目を向ける

なのはと幸太郎は恋人ではありません

加害者 被害者
なのはと幸太郎です

「ちょっと…心が揺れかけたけど、なのはさんが怖いんで遠慮します！」

スバルは深く考えずに普通に対応していた

…この段階では

「ボソツ…（この女性はなかなか簡単には釣れないなあ…）」

幸太郎が何か小さく呟いたが、3人がソレに気づくことはなかった…

そして、今度はまた別の女性がそこに通りかかる

幸太郎はその女性の方を向き

「あの…僕と少しお話をしませんか？あつ、ごめんなさい…急にこんなこと言われても迷惑ですよ…故郷に残した姉に似ていたもので…つい」

「（あれ…？幸太郎さん一人っ子って言ってなかったっけ…？）」

スバルもさすがに異変に気づいたようだ

そして、幸太郎はその女性にもう何回か言葉を掛けると

手をとって楽しそうに歩いていったのだ…

「おい…スバル…」

「なんですか…ヴィータ隊長？」

「ここは夢の中か？」

「…かもしれません」

「……………」

フェイトにいたっては口が開いたまま、思考停止していた

「（幸太郎のことに關しては、なのはの心は『閉鎖』と『開放』の二択しかねえからな…気を付けねーと…）」

「ごちそうさまでした。じゃあ、なのはさんはちょっと幸太郎君を探してくるね」

ガタツ！

スバルが勢いよく席を立つ

「なのはさん！少し教えてもらいたいことが！」

「ふえ？な、なにかな？」

スバルの尋常じゃない様子にたじろぐなのは

「ここじゃなんなので、アッチで！」

スバルがなのはの腕を掴み連れて行く

「よくやったスバル…！今のうちに…おい、みんな聞いてくれ！」

呆氣にとられていた他のメンバーにヴィータとフェイトが今朝のことを説明する

「それはまた…なんて命知らずな…」

ティアナが幸太郎に黙祷をささげる

「でも…なにかおかしくありませんか？」

元デンレンジャーレッドは幸太郎の変わりように疑問を覚える

「うん。それは私達も気づいてる…多分、リュウタロスと同じ、良太郎のイマジンじゃないかな？ほら、前にリュウタロスが…
『えー、だって亀ちゃんはナンパするし、熊ちゃんは冬眠中だし』
って言うてたし…」

「亀ちゃん…か」

シグナムが若干呆れながら相槌を打つ

「とにかく、早く幸太郎さんを見つけないと…!!」

キヤロは幸太郎の『周囲からの信用と命』のために、幸太郎の捜索に出かけた

「私達も手分けして探そう」

フェイトの提案に頷き、それぞれ幸太郎を探しに行くメンバー

しかし、彼女達は知らなかった…

これから起こる、究極の奇跡を…

番外編 幸太郎捕獲大作戦 後編

SIDE

フェイト

「幸太郎……どこー？」

皆さん、こんにちは。フェイト・T・ハラOWNです

私は今、亀ちゃん（仮）に憑依された幸太郎を探しています…

もし、なのはが幸太郎（の体）がナンパしているところを見つけたら…

私達の夢

…機動六課はお終いだ…

いや、それもあるけど、それ以上になのはは悲しむだろう…

友達が悲しむところなんて見たくない…！

早く、亀ちゃん（仮）を見つけて、事情を説明しないと…！

そう思いながら、曲がり角を曲がる

「……！！！」

そこで、私は見てしまった…

奇跡を…

「本当に今日の幸太郎君はお上手なんだから。ところで欲しい物とかある？」

「欲しいもの…愛かな」

なのはが釣られてるっ！！！！！！

ある意味、助かったけど…

これはこれでなのはが怒るんじゃない？

「……じゃっ、また後でね」

話が終わって、幸太郎（亀）はどこかへ去っていきます

なのははピンク色のオーラを出しながら、見送っています…

「な、なのは？」

「あ、フェイトちゃん！あのね…！」

そこから、なのはは小一時間使って、幸太郎と両思いになった喜びを伝えてくれました…

恋は盲目って本当ですね

でも…ちゃんと教えなくちゃいけないよね

「なのは…落ち着いて聞いてくれる…？」

「どうしたのフェイトちゃん」

「じつは…あの幸太郎は…」

そこから、なのはに全てを教えました…

そして、彼女の導き出した答えは…

「…あ、もしもし。はやてちゃん？あのね…リミッター解除ともみ消す準備、いいかな？」

なにを！？

悲しんでいる様子は無くて良かったですが、その分、亀ちゃん（こ愁傷様）に怒りが行っているようです…

一応、良太郎のイマジンなんですよね、亀ちゃん？

「じゃあ幸太郎君を使って、私を騙した悪い子にお仕置きしに逝くか」

私は今、どんな反応を求められているのでしょうか？

お仕置き…ティアナの時より瞳が素敵になってるね、なのは？

「た、確かにあんまり褒めれる事はしてないけど…一応、良太郎のイマジンだしね、ね？」

「お義爺ちゃんのイマジンでも、やって良い事と悪い事があるのを教えるだけだよ」

ツツコミは読者さんに任せます。疲れました。

『なのは隊長！野上幸太郎を発見しました！エリアD4で鼻歌を歌いながら携帯端末をいじっています。どういたしますか？』

「オツケー…ゼクトル13部隊はそのまま待機ね、私が直接行くよ」

機動六課にかつて無いチームワークと謎の部隊が編成されています

…

ゼクトル”

『ゼ』ツタイ

『ク』ルシイ思いをしている

『ト』クベツ部隊の

『ル』ーパー達

今はただ、亀ちゃんにどうやって危険を伝えるかだけを考えています…

でも、そんな私の想いとは裏腹に、なのははバリアジャケットを展開して

亀ちゃんのいるエリアに向かっていきます

「おゝい、幸太郎君」

「あつ、なのはちゃん。もしかして、僕に…」

「デイベインバスタアアアアアアア！……！！……！！……！！」

非殺傷設定のはず。非殺傷設定のはず。非殺傷設定のはず。

だから、撃つても大丈夫なんだ、きっと！

「危なっ……！」

亀、離脱。

「……ん？俺は……確か……って！うそおおおおおお……
……」

…あ

「いやゝ、ごめんねゝ。ほら、良太郎の今のサイズじゃ女性には釣れないしさ。仕方なかったんだよ」

「おい、コイツ反省してないみたいだぞ…おかげで時間と貴重な人員一人が散ったのによ」

ヴィータが『ウラタロス』に憎々しげに言う…

「まあ…悪気は無かったみたいだし…そろそろ許してあげようよ」

私はゼクトル総勢28名となのは、フォワード、隊長に囲まれているウラタロスがさすがにかわいそうになってきた…

「はいはい。ちょっと通してな」

「あ、はやて」

ゼクトルの皆を割って、はやてがウラタロスの前に立つ

「で、ウラタロス、本当の用事はなんやったんや？」

…え？

「いくら良太郎君でも、さすがにナンパさせるためだけに君を送ったとは思えへん…なにかあったんか？」

はやての言葉に、ウラタロスは感心したようにはやてを見る

「へえ…意外と鋭いね？でも、僕もただで教えるのは…」

「構え」

ガチャ

…ゼクトルの皆がいつせいにデバイスを構える

「スイマセン、今の暴言は海に流していただけます？」

「ええよ。じゃあ用件聞かせてくれるかな？」

「どうやら、奴さん^{やつ}が本気で僕達を潰しにかかってきたみたいだね、幸太郎にはやく『アレ』を身に着けるために、僕が鍛えてあげようと思ったんだけど…」

嘘だ…絶対に嘘だ…

だって、心なしが顔がにやけて見えるよ？

本音はナンパするために良太郎を言いくるめたみたいだ…

でも…敵が本気で幸太郎たちを倒す気だって言った時は、マジメに見えた…

もしかして…私達が知らないところでどんどん戦いは進んでる？

番外編 幸太郎捕獲大作戦 後編（後書き）

ずいぶん前から、やると思っていた大長編がやっと公開できそうです！！

なので、ここで予告をしようと思います

合わせ鏡が無限の世界を形作るように、現実における運命も一つではない・・・・・・・・

それは、誰かの言葉

同じ物語でも選択の違い一つで物語は2つに増える・・・・・・・・

その選択の違いが増えれば増えるほど世界は変化していく・・・・・・・・

しかし、ほんの少しの運命で物語は簡単に交わる・・・・

今ここに、3つの物語が交錯した世界が生まれる・・・

特別大長編

仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは S t r i k e r s +
s t r i k e f o r m

｝ T H E ・ L A S T ・ B L A D E ｝

「電王だ！！電王だ！！コイツ殺せばいつきに幹部だぞお！！！」

「幸太郎さんのおかげでイマジンへの対処もできてますし、本当に幸太郎さんがこの世界に来てくれて良かったです！」

「違う」

「俺は剣崎一真…またの名を、仮面ライダーブレイド！！」

「パパ…いなくなっちゃうの……！？」

「幸太郎、私には誰が正しいかは分からない。しかし、何があっても私は幸太郎の味方だ」

「いくぞ、テディ、アギト、ジーク、一緒に戦ってくれ！」

『私は出番があればそれでよい』

カウントダウンへの下準備（前書き）

更新遅れてすいませんでした！

前回感想を書いてくださった

皆大好きさん

超人類さん

霞 空斗さん

断空我さん

ブラッキンさん

ボンチューさん

仮面ライダーディケイドさん

ありがとうございました！！

これからもしろしく願います！！

カウントダウンへの下準備

SIDE

幸太郎

『やっぱり俺達、最っっ高のコンビだな!』

『ああ!最高だ!!!』

…そうだ、あの日…

『これからもずっとうまく一緒にやっていけそうだな』

あの日、俺は大切なものを一度失った…

大切な相棒の体が光の粒子になって消えていく…

『…テディ』

俺の相棒…テディが消えていくのを黙ってみている事しか出来ない…

『……幸太郎。私は、自分で自分の行き先を決めたのは…実は今度が初めてだ』

テディは言葉を続ける

『気分のいいものだな』

『…ああ…だから…消えるな…消えるなよテディ!』

テディが消える…それを認めたくなかった

『…幸太郎…コレを』

テディが何かを取り出す

それは星の装飾がされたお守り…

『多分、私の代わりにお前を不運から守ってくれる』

俺がそれを受け取ろうとした瞬間…

サアアアアア…

…テディは『時間』から消滅した…

俺はその場にひざを付きながら、テディの残してくれたお守りをとる

『…バカ…これ縁結びじゃないか…お前がドジるなんて初めて見た…

お守りを握り締める…

そして、じいちゃんが前にそうしたみたいに

消えたテディの粒子を携帯電話の形にする…

じいちゃんにセンスないって言ったけど…

俺もセンスないよ…

本当に……

「ハッ！」

俺は…寝てたのか…？

「……目が覚めたのか幸太郎！？」

「……テディ」

「幸太郎君…よかった…」

「…なのは」

「兄貴！ケガは大丈夫なのかよ！兄貴…安心してくれ、兄貴の敵はあたしがとるからな！」

「…アギト」

それ、結局俺が戦ってないか？

「パパーー！！！」

ドスッ！

「っ！……ヴィ…ヴィオ…」

寝起きに、小さい子供の突進は効いた…

そうだ…俺はシャスに負けて…

そうだ、爆弾は！？

「デデイ！爆弾は！？」

「…私達が戦っていた階が爆発…負傷者は出なかったが、結構大きなニュースになっている…」

「…じいちゃんは？」

なのはがその質問に答える

「良太郎君は今、はやてちゃんと話をしてるよ」

「アンタ…兄貴が運ばれてきた時はこの世の終わりみたいな顔してたくせに…意外と冷静だな」

アギトが感心したように言う

「なっ！」

なのはがなんか赤面してる

仲間を心配するのは恥ずかしい事じゃないぞ？

でも、今はそんな事を気にしてる場合じゃなかった…

「…テディ、アギト…あとジークもいたほうが良いな、後でちよつといいか？」

「へっ？あたしはもちろん良いけどよ。どうしたんだ兄貴？」

「幸太郎…使うんだな『アレ』を…」

テディがどこか悲しみを込めた声で言う

「『アレ』？前も言ってたけど、なんなんだ、それ？」

「…じいちゃんが四体のイメージを同時に憑依させるみたいに、俺もこのケータロスでテディとアギト、あとジークを同時に憑依させられるんだ…」

俺をポケットからケータロスを取り出してアギトに見せる

「だが、良太郎のようにイマジンを憑依させる戦い方ではない幸太郎が無理やり3体も憑依すると…本来なら4人で分担するはずの負担がいつきに幸太郎に押し寄せる」

つまり…

「それって…幸太郎君がとっても危ないって事…？」

そういうことだ

「パパ…？」

ヴィヴィオはよく話が分かってないけど、なにかを感じ取ったみたいで、俺にくつついたまま離れない

「冗談だろ、兄貴！あたしはそんなことしないからな！」

アギトはどこかへ飛んでいこうとする…でも

「頼む…！」

俺は迷い無くアギトに頭を下げる

「兄貴…でも………分かった…あたしは兄貴を信じる」

アギトは今ひとつ煮え切らないみたいだけど、渋々了承してくれた

幸太郎

SIDE OUT

「
ネガタロスの動きについて分かってるのはこれくらいです」

「そっか…幸太郎君のこともあるのに呼び出してごめんな…」

「いや…皆が迷惑をかけてますし…」

はやてと良太郎は今、部隊長室で互いの情報を交換していたとあるイマジン4体によって六課が結構な被害を受けているので、良太郎は少し縮こまっていた

「それにしても…シャス…なかなか面倒な相手が出てきたもんな
…」

はやてがため息を小さくついていると

「じいちゃん、居る!?!」

幸太郎が勢いよく、部隊長室に飛び込んできた

傍らには、テディ、アギト、ジーク、捕らえられたイマジン4体が
居た

「お久しぶりです」

「アンタが兄貴のじいちゃんか!…あれ?小さくねえ?」

「久しぶりだ、我が友よ!」

「ちつくしよ、幸太郎!俺はプリン食うのに忙しいんだよ!離せ
コラー!」

「適当な男の人に憑依して女性を釣ったのに…まさか僕が捕ら
れるんてね…」

「ZZZZZZZZ」

「僕は遊びたいの!離してよ、幸太郎!」

「……………幸太郎?」

良太郎もこのシュール極まる状況にはさすがに少し困惑していた

そして、幸太郎が口を開く

「じいちゃん、クライマックスフォームで俺と戦ってくれ。俺も力
ウントダウンフォームを使うから」

カウントダウンへの下準備（後書き）

キンタロス「キンタロスと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「遂に分かった『アレ』の正体、それは主人公の特権、最強フォームでした！」

キンタロス「zzzzzzzz」

テディ「あの、もう少し反応してくれても……」

キンタロス「ん？……おお、天井は出番あつてよかったな」

テディ「……………」

別の『時間』の来訪者（前書き）

今回、霞 空斗さんの『時間を駆ける電王』とクロスしています！

前回感想を書いてくださった

ブラッキンさん

超人類さん

霞 空斗さん

疫病神さん

断空我さん

矢部野 和麻呂さん

ありがとうございました！！

別の『時間』の来訪者

「幸太郎：カウントダウンフォームって…もしかして…アレを使うつもりなの…？」

良太郎は幸太郎に驚愕を含んだ視線を向ける…

近くにいるイマジンとアギトの事は完全に頭から抜け落ちているようだ

「うん。そりゃ、急には扱いきれないかもしれないけどさ…少しでも力が欲しいんだ」

そういった幸太郎の目には迷いはなかった

「でも！アレは…」

「いいじゃねえか、良太郎」

良太郎が反論をしようとしたところで、モモタロスが口を挟む

周りにいるイマジンたちもモモタロスを止めようとはせず、彼の言葉に耳を傾けていた

モモタロスは言葉を続ける

「どつちにしろ、このままじゃジリ貧なんだ。幸太郎にやる気があるんだったら好きにさせてやれよ」

ぶつきら棒で、憎まれ口。でも、それは彼が人と付き合っのが苦手なだけで

長い時間一緒に戦ってきた良太郎にはその言葉に隠された彼なりのやさしさを理解していた

しかし、良太郎はまだ納得しきれないようだ

「……ところで、さっきから放置されてるウチはどうしたらいいんや？」

某部隊長が何か言ったらしいが、誰にも聞こえていなかった

「……分かったよ。でも、危なくなったら止めるよ」

「うん！」

結局、良太郎は渋々ながらも了解し、訓練に付き合うことにしたようだ

話がまとまったところで、部隊長室を出て行くメンバー

「……結局何やったんや……？」

「この場所の使用許可もらってきたよ、幸太郎君」

「ああ、ありがとうな。なのは」

「じゃあ、はじめようか」

さつきからいかにもめんどくさそうにしているモモタロス

話を聞いて、様子を見に来たフォワードと隊長陣を口説くウラタロス
爆睡しているキンタロス

エリオを操って無理やり躍らせているリュウタロス

このイマジン4体の前に、良太郎が立ち、ケータロスの3・6・9・
#のボタンを押す

「みんな、行くよ!」

『モモ・ウラ・キン・リュウ』

「全員集合!クライマックスだぜ!」

モモタロスの合図と共に良太郎に憑依していく4体のイマジンたち

あたりにミュージックホーンが響く

『Climax Form』

良太郎が電王の鎧に包まれていく

ソードフォームの桃の皮が剥けた様なデンカメン

両肩と胸に装備されるそれぞれのフォームのデンカメン

クライマックス

C電王へとその姿は変わる

「あれが…良太郎さん…幸太郎さんのおじいちゃん…！」

「かつこいい…！」

「エリオ…センス大丈夫？」

「でも、なんだか強そうですね」

「ちょっとキモくねえ？」

「そんなこと言っちゃ駄目だよ、ヴィータちゃん」

「後で私も手合わせ願いたいものだな」

「ところで、良太郎の要素は…」

「あれ？今の状況が理解できてないのウチだけ？」

「電王をみて、三者三様の感想を漏らすメンバー

「ちょっと待て！5番目のチビ！！キモイって言うなー！！！！」

「ああ……？誰がチビだつて……！」

幸太郎より先にヴィータが「電王と拳で語り合っているが、そんなことはどーでもいい

「それじゃあ……俺達もいくぞ！テディ、アギト！……あつ、あとジーク」

「負担があればすぐに言うんだぞ」

「兄貴とならどこまでも！」

「ところで、今の間はなんだ？今の間は？」

幸太郎も藍色のケータロスを取り出し、3・6・9・#のボタンを押す

『コウ・テディ・ジーク・アギト』

ケータロスターミナルバックルへセットし、ライダーパスをセタツチさせる幸太郎

『Count Down Form』

幸太郎にフリーエネルギーの鎧が装備される……その瞬間

「ぐうつ……あああつ……あああ!!」

幸太郎の周りに集まっていた鎧が砕け散り
幸太郎はそのときの衝撃で吹っ飛ばされる

「幸太郎!」

「兄貴!？」

幸太郎の体から弾き飛ばされたティとアギト、他のメンバー達も
幸太郎に近寄っていく

「……………」

幸太郎は何も答えない…

「幸太郎君っ! 幸太郎君ってば!」

なのはが幸太郎の頬をぺちぺちと叩くが反応がない

気を失っているようだ…

「…チャンス」

なのはが目を閉じて、ゆっくり幸太郎の顔と自分の唇を近づけて

「って、ええええええええ!! ちょっと何してるんですか!？」

だが、我が孫のピンチに僕等の野上良太郎がなのはと幸太郎を引き

離す

さすがに、C電王の状態の良太郎の力に敵うはずもなく、簡単に引き離されるなのは

しかも、その後にアギトがなのはに威嚇をし続けたため、手を出せなくなってしまう

「……きっと幸太郎は、良太郎に感謝するだろうな……」

誰かが言った言葉に、その場の全員が、うん、と頷いていた

なのはが拗ねたように頬を膨らませていたのは別の話……

「それはそうと、シャマルに連絡した方が良いか？」

「はい。お願いします。シグナム」

S I D E

幸太郎

… 失敗か

吹っ飛ばされる瞬間にそう思った

やっぱ、急に強くなろうなんて無理な話か…

「幸太郎君っ！幸太郎君ってば！」

… なのはの声が聞こえる

でも、意識はあるのに体が動かない

まあ、今はこのままでも良いか…

「… チャンス」

今すぐ起きないと！！

ヤバイ… しかも、最近のなのはの奇行を止めてくれる奴はいないし

…！

なのはの顔が近づいてくるのが分かる…

ヴィヴィオに悪影響が出たらどうするんだよ！

というか、何がどうなって、こうなった!?

「って、えええええええええ!! ちょっと何してるんですか!?!」

じいちゃんがなのはを引き離してくれたのか
なのはがまた襲ってくる気配はない…

ありがとう、じいちゃん

今ほどじいちゃんに感謝した事はないよ

でも、俺は何で起きられないんだ…?

「まあ、そんなに深く考えないほうが良いぞ?」

誰だ?

今の声は聞き覚えがない…

誰がいるのか?

「ここにいるぞ。ほら、こっちだつての」

…お前は…?

「俺は皇ソウヤ。お前と同じ、NEW電王だ」

別の『時間』の来訪者（後書き）

ソウヤ「ソウヤと」

テディ「テディの」

2人「次回予告コーナー」

テディ「わざわざご足労ありがとうございます。ソウヤさん」

ソウヤ「…なんかテディに敬語使われるのは気持ち悪いな…」

テディ「霞 空斗さんの『時間を駆ける電王』をからのゲスト出演ですね」

ソウヤ「ああ、そっちもよろしくな」

番外編 デート前半戦（前書き）

現在、ネタ切れ中です・・・

ネタをくれる方！！

どうか感想に送ってください！！

番外編 デート前半戦

「じゃ、じゃあ、そろそろ行こうか」

幸太郎は少し緊張気味に隣にいる女性に声をかける

彼は生まれた初めて『デート』と呼ばれる行為をするのだから無理はない……

しかも、その相手はかなりの美人

事の発端は数時間前……

「事件です！事件です！」

八神はやて……部隊長で超忙しいはずなのに、常に明るい彼女がいつもの調子で叫ぶ

部隊長室に集められたのは3人

幸太郎、フェイト、なのはだ

「はやて……今度はどうしたんだよ？」

幸太郎が鬱陶しそうに呟く

彼は、一度彼女の思いつきでご当地ヒーローをさせられたのだから無理もない

「事件って・・・ロストロギア絡みの？」

対して、フェイトは少しマジメな表情ではやてに問う

「いや、今回はロストロギアは無しや・・・。」

はやての表情はいつもに比べて少し変だ・・・

強いて言うなら、なにかを惜しむような・・・

それでいて、若干、笑いを堪えるような

「今回は・・・この近くでカップルがよく襲われる事件が起きるのは知っとる？」

「あ、私は聞いた事あるよ。確か・・・20代前後のカップルがよく襲われるとか」

なのはが何かを思い出したように言う

それに、はやては少し頷いて答える

「せや・・・ほんまならウチらの管轄外やねんけどな・・・今回はちよつと事情が変わっとつてな」

はやては、一呼吸おいて続ける

「今回の事は、イマジンの犯行って事が分かったんや」

なんでも、現行犯を捕らえようとした管理局員が『ヤギみたいな化物』に襲われたらしい

そこまでは、理解していた・・・

「というわけで、幸太郎君、髪を金髪にして、フェイトちゃんとデートしてきてな」

幸太郎には、その一言が理解できなかった

「本当に金髪に染められちゃったし・・・」

幸太郎が嘆くように自分の金色に染まった髪を見る

「仕方ないよ・・・だって今回の事件は金髪の男女がよく狙われるらしいんだから・・・」

フェイトも、仕事と割り切っていながらも、少し申し分けなさそうだった

結果として、親友の意中の人とデートをすることになってしまったのだから

数メートル後ろ

「これは仕事、これは仕事、これは仕事・・・」

なのはが呪詛の言葉をぶつぶつと呟いていた

幸太郎にも、フェイトにも、まして、はやてにも非が無い事は分かっている

それでも、胸のうちに何かモヤモヤしたものが生まれる彼女だった

自分の今回の仕事は、完全無防備の2人にイマジンを近づいて来た場合の援護射撃だ

手元が狂って、幸太郎ごと逝くかもしれないが、彼の事だ、大丈夫

「デートって・・・何をすればいいんだろう・・・？」

普段から忙しいフェイト

なのは、フェイト、はやて

普段から仕事中毒のこの3人のうち

2人も休む（表向きは）ことなどめったに無いので、六課も少し大変な事になっているほどだ

それほどに遊ぶ事の少ないフェイトとしてはデートとは何をすればいいのかわからなかった

「幸太郎はデートしたことってあるの？」

何気なくした質問だったが、答えは予想外のものだった

「あるけど？むしろ、フェイトってデートしたこと無いの！？」

「・・・・・・・・え？・・・・・・・・ちょっと・・・・・・・・もう一回いいかな？」

「いや、だからデートくらいならしたことあるけど・・・・・・・・」

気まずい空気が二人の間に流れた・・・

フエイトは、今だけは隣にいるのがなのはでなく、自分でよかった
と思ったとか

幸太郎に恋人は現在いません

彼の中では、女友達数人と男友達数人のお出かけ＝デート です

数メートル後ろ

「・・・・・・・・2人とも、なにを話してるのかな・・・・・・・・？」

正直、2人が何を話しているのかすごく気になる・・・

出来もしない読唇術を使ってみる事にします

「コ、ウ、タ、ロ、ウ、ハ、デ、ニ、ト、タ、ノ、シ、イ？」

幸太郎はデート楽しい？

「オ、ン、ド、ウ、ル、ラ、ギ、ツ、タ、ン、デ、イ、ス、カ！？」
本当に裏切ったんですか！？

・・・あれ？間違えた？

と、思ったら・・・コンドは二人とも何か気まずそうだし・・・

うう~~~~!! 気になる!!

「とりあえず、このあたりを適当に回ってみるか？」

「うん。やっぱり、それが無難じゃないかな」

2人はまた歩き出す

その姿を遠目に見ている異形の存在に気付かず・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8707o/>

仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers + strikeform

2011年3月23日19時11分発行